

## メールマガジンについて

メールマガジン「MG☆ボラマガ」は配信を始めた2006年12月以来、Vol.33まで配信している(2009年1月17日現在)。2008年度は、「学生のための、学生にとって利用価値のあるツール」としての価値を創造することに焦点を絞った工夫を加えることによって、学生に広くボランティアセンターの存在を周知し、更にボランティア関連情報の提供ツールとしての役割を高めることを目指した。

まず、前年度は配信が原則として毎月1回だったが、今年度からは毎月2回(原則1日と15日)に配信回数を増やした。そして、1日配信の号は主にボランティアセンター関係のニュースと現場で汗を流す学生の紹介や、本人が執筆した記事の内容に集約し、地域から寄せられるボランティア情報は15日に配信する号に集約した。これによって、提供する内容を整理することができ、何よりも学生を紹介する機会を増やせたことで、同年代の学生たちのいきいきとした様子や声を学生に伝えることができた。また、記事も学生に執筆してもらうことで、執筆した学生自身の振り返りや活動における励みにつながり、読者の多くを占める学生たちにとっても身近で、親しみやすい、読み物になったと考える。その他、臨時号を積極的に配信し、学生たちが企画する活動や企画の広報手段として利用してもらった。2009年1月17日現在、2008年度に配信した臨時号は20号にのぼり、臨時号の配信回数が2回だった前年度に比べて大幅に配信回数が増加した。これによって、「MG☆ボラマガ」が学生のボランティア・社会貢献活動を促進するための、利用価値のある手段としての特色も出すことができた。

2009年1月17日現在、登録者数は、416名であり、内訳は学生が368名、教職員が48名である。今年度が始まったころ(2008年4月1日現在)は、卒業生の登録を削除したこともあり登録者数は261名だったので、155名の増加、約4割増である。増加した理由については、4月の学生部主催新入生オリエンテーションにおいて、白金学生スタッフが携帯電話で登録ページを読み取ることのできるQRコードが記載された案内チラシを作成、配布し、ボランティアセンターでも来室学生に対して積極的に紹介したこと、またセンタースタッフたちも白金・横浜の両ボランティアセンターにおいて積極的に来室学生に紹介したことが功を奏したと考える。実際、登録者中1年生は94名であり、増加人数の6割を占めている。また、登録者が劇的に増加したのは春学期であり、7月末の時点で390人に達している。以上のことから、登録者数の増加のためには、「新入生」、「年度始め」が非常に重要なキーワードであることが明らかとなったので、2009年度は年度始めからさらに積極的な広報を展開していきたい。

現在のところ、登録は明治学院大学に在籍する学生及び教職員に限っており、登録方法も学内者専用ポータルサイトからのみであるため、今後も明治学院大学の学生のための、そして明治学院大学の特色を出したコンテンツ作りを心がけていきたい。そして来年度は学生にもっと積極的に関わってもらい、学生に利用してもらえらる媒体であることをアピールし、学生との協働体制を構築していきたい。

(李)

## ボランティア募集团体 ―登録状況と学生へのボランティア情報の提供

ボランティアセンターでは、2006年度よりボランティアを募集する団体に登録を依頼している<sup>1</sup>。登録数の推移をみていくと、2006年度には124団体であったが、2007年度には237団体、2008年度1月時点で306団体と増加している（図1参照）。また、インターネットでボランティア情報の発信をおこなうボランティア情報システム（VIS）には、全体の68%（207団体）が登録している。

登録団体の種類は、特定非営利活動法人（以下、NPO法人）が最多で28%（88団体）、2番目に多いのは社会福祉法人が25%（75団体）であり、本学に寄せられている募集の半数以上がNPO法人と社会福祉法人で占められていることがわかる。公共団体（自治体や福祉センターなど）が8%、続いて財団法人と市民団体、教育機関が6%になっている。社団法人と独立行政法人は1～2%であった（図2参照）。

活動分野として多いのが、子ども・青少年の25%、続いて障がい者の21%である。上述の法人種別のデータと合わせて考えると、社会福祉分野の活動団体からの依頼が高い割合を示していることが分かる。国際協力と祭り・イベントが8%、高齢者が6%となっており、まちづくり、環境、平和、スポーツ、中間支援、医療・保健・音楽・美術・芸能、心理、インターン、スタディツアー・ワークキャンプ、災害などの活動は、1～4%になっている（図3参照）。

本学生が希望する活動分野として在校生アンケート（明治学院大学ボランティアセンター報告書第4号2007「在校生のボランティア意識」を参照）で上位に挙げられている子ども分野に関しては、募集团体数と希望学生数ともに多いが、国際協力は49団体、環境は24団体である。環境分野の活動に関しては、登録団体のわずか4%であり、センターとして環境分野の情報が不足していることが分かった。今後は環境団体とのつながりをつくり、学生に提供する活動を充実させていく必要がある。

登録されている団体からセンターに寄せられるボランティア募集の情報は、センターでのボランティア情報の閲覧、学生から相談を受ける際の資料として利用するほか、説明会を通じて、学生に各団体の活動を紹介して、参加を呼びかけている。今年度は白金で2回、横浜で8回の説明会を開催して、ボランティアに興味のある学生が直接団体から話を聞ける機会を提供した（説明会の様子は、本書「白金校舎ボランティアセンター報告」「横浜校舎ボランティアセンター報告」を参照）。説明会で話を聞いたことがきっかけに、活動に参加するようになった例も多く、人と人が顔を合わせて、活動のねらいや内容を伝えていく必要性と効果を感じた。特に、卒業生が活動している団体や学生の紹介をきっかけに説明会を実施したものは、その後に活動に参加したり、自分たちで話を聞きに行く学生が多くみられている。学生にボランティア情報を伝える電子媒体として、今年度よりメールマガジンで月に1回「ボランティア情報号」を配信し、センターに届けられている情報を定期的にメールマガジン登録学生の手元に届け

<sup>1</sup> 登録のねらいや方法については、「明治学院大学ボランティアセンター報告書第4号（2007）」を参照。

ている。加えて、地域と学生を「つなぐ」というボラセンの近年の目標にあわせ、大学近隣地域での活動については、学内の電子掲示板「ポートヘボン」に掲載するなど、学生がセンターに立ち寄らずとも、ボランティア情報を入手できるような環境を整備した。また、ボランティア情報システム（VIS）には、平均して1日に約50回のアクセスがあり、安定的に活用されている。

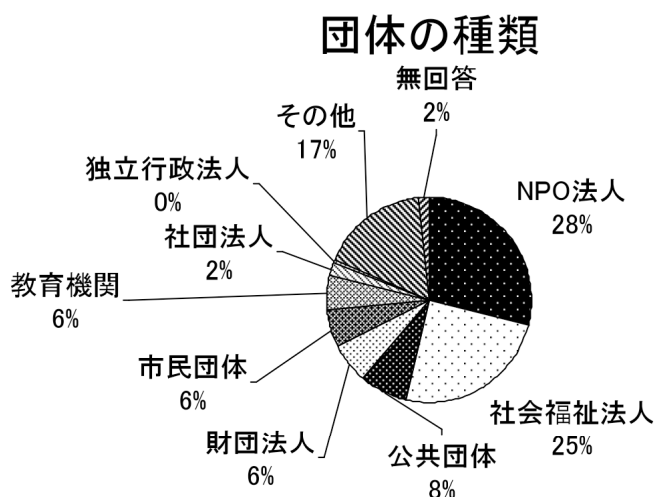
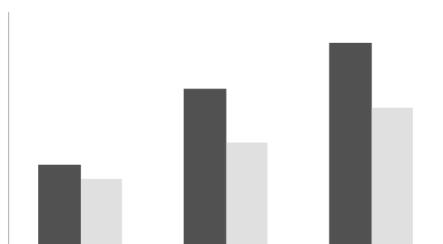
今年度はメールマガジンで定期的にボランティア情報を配信したり、ポートヘボンなどを通じて、常に学生のところにボランティアを募集している情報が届く環境などインターネットやメールを使った環境整備をおこなうことができた。今後は今年度効果が高かった在校生や卒業生などネットワークを生かしながら説明会を開催するなど、人のつながりを生かした環境整備に取り組んでいきたい。また参加学生からは「センターから情報を得て参加するだけでなく、ボランティアに参加した学生同士で共有できる場がほしい」というリクエストもあるので、送り出しだけでなくその後のフォローアップも取り組んでいければと考えている。

(糸井)

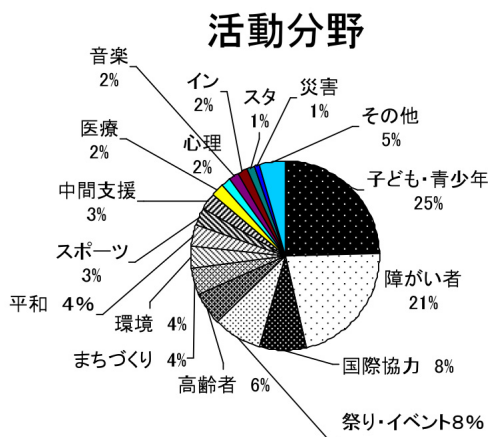
【図1】

登録団体の状況

【図2】



【図3】



《表中の省略》

医療：医療・保健

音楽：音楽・美術・芸能

イン：インターンシップ

スタ：スタディツアー・ワークキャンプ

## 2008年「国際機関実務体験プログラム」について

ボランティアセンターでは、(財)横浜市国際交流協会(以下、YOKEと記載)と共催で「国際機関実務体験プログラム」を行っている。本プログラムは、YOKEが横浜市内に集積する国際機関の活動を広く市民に周知する目的で市内の大学に協力を呼びかけたことがきっかけとして始まり、学生達が国際交流や協力の実務体験の場を国際機関等で体験することにより、大学で習得した知識と現場での実践の融合及びその応用、国際性豊かな資質と世界的な問題を視野に入れて活動できる人材を育成することを目的としている。

本プログラムは2005年春から開始し、4年経った現在では横浜国立大学、横浜市立大学、フェリス学院大学が加わり、YOKEと4大学合同のプログラムになっている。プログラム全体の企画・運営を行うYOKE(国際機関・大学間の調整など)、受け入れ機関である国際機関、学生を派遣する立場である大学の3者が協力して運営しているプログラムである。本稿は2008年度の報告書であるが、春期に行うプログラムが年度の境目であるため、2008年の春期と夏期に実施したものについて行う。また、プログラムは、YOKE、国際機関、大学の3者で行っているが、本稿では本学ボランティアセンターによる取り組みや本学の学生たちの様子を中心に、報告を行うこととする。

2008年春期には、国連大学高等研究所(UNU-IAS)、国連食糧農業機関(FAO)、アジア太平洋都市間協力ネットワーク(CITYNET)、横浜市国際交流協会(YOKE)の4機関に各1名の学生を、夏期には国連大学高等研究所(UNU-IAS)、国連食糧農業機関(FAO)の2機関に各1名の学生を派遣した。

プログラムには毎年多くの学生が関心をよせており、今年も平均して3倍の学生たちの応募があった。ゼミやサークルの先輩から話を聞いて興味をもったり、プログラム参加のため1年以上の準備を重ねて申し込んだ学生もいるなど、毎年問題意識の高い学生たちが応募している。参加学生の募集は、11月(春期)と5月(夏期)に行い、書類選考と個別面接を経て決定した。プログラムの流れは、次ページに【表1】としてまとめた。

ボランティアセンターでは事前指導として、2度のオリエンテーションを行った。オリエンテーション(1)では、プログラムや国際機関についての説明の後、過去のプログラム参加学生から国際機関で実務体験を進めるうえでの心構えや姿勢についての話があった。オリエンテーション(2)においては、国際機関のミッションや活動内容について、事前に各自が学んだことを発表したり、研修を通して自分が到達したい目標についてのプレゼンテーションを行った。これは研修する機関について理解を深めておくことが、各機関での活動にスムーズに入る準備となること、また自分が取り組む目標を設定するための助けとなることから行ったものである。YOKEが実施するオリエンテーションでは、プログラムに参加する学生による自己紹介、プログラムの趣旨と国際機関が学生に求めるものの説明、研修中の留意点とマナーの伝達、100時間スケジュールや研修目標の設定など、情報の共有化をはかり、研修への意

識を高めている。また、研修開始前に国際機関と学生たちが面談する機会を設定している。

100時間にわたる国際機関での研修では、各分野最先端の活動が進められていた。例えば、YOKEが夏休みに実施した「多文化共生フィールドワーク講座」開催のため、外国籍の子どもたちが多く通う小学校との事前調整に同行したり、当日の講座運営に携わったり(08年夏期 YOKE 研修学生)、アフリカ・サブサハラ地域の食糧増産の手段として注目されているネリカ米(New rice for Africa)の可能性と課題について、日英の資料を読みこなしレポートを作成したり(08年春期 FAO 研修学生)、世界各国の「持続可能な開発のための教育(EfSD)」の取り組みがまとめられている報告書のデータ集計の補助を行う(08年夏期 UNU- IAS 研修学生)など、国際機関が取り扱う具体的な活動に携わっていた。

プログラムの最後に行われる報告会では、学生たちは活動から得た学びの成果をまとめ、YOKE、国際機関、大学担当者が同席する場で発表を行った。学生たちは、「サブサハラアフリカ地域における持続可能な農業開発」や「学生や青少年が国際交流・国際協力を深める環境づくり」などのテーマで発表を行い、その後出席者から質疑応答があった。研修終了後に、研修のテーマや目標、それをどのように学んだか、それをどう生かしていきたいかなどを学生がまとめた報告書を作成した。学生たちは国際機関の担当者から報告書の内容や研修中の様子についてコメントをもらい、YOKE、国際機関、大学に提出した。

【表1】

日程	内容
オリエンテーション(1)〔大学〕 春期 12月15日 夏期 6月28日	・プログラムや国際機関について、センターから説明。 ・実務体験をおこなう際の心構えや姿勢を伝える。 ・次回までの課題の提示。
オリエンテーション(2)〔大学〕 春期 1月12日 夏期 7月4日	・活動先となる国際機関のミッションと活動内容に関するプレゼンテーション。 ・研修目標の設定準備。
YOKEオリエンテーション〔YOKE〕 春期 1月18日 夏期 7月9日、12日	・研修学生初顔合わせ。 ・プログラムの趣旨説明と研修上の注意。 ・研修目標の設定に関するアドバイス及び100時間スケジュールの作成。 ・研修上の注意。 ・受入機関面談オリエンテーション。
国際機関での実務体験〔国際機関〕 2008年2月～3月 2008年8月～9月	活動先(春期):FAO、UNU-IAS、YOKE、CITYNET (夏期):FAO、YOKE ※15日以上、100時間
中間研修〔YOKE〕 春期 2月26日 夏期 8月29日	・国際機関、学生、大学担当者による3者面談。 ・YOKEと大学担当者の意見交換会。 ・学生による国際機関見学会
報告会〔YOKE〕 春期 3月18日 夏期 9月19日	・学生による研修成果の発表。 ・YOKEと大学担当者の合同ミーティング。
報告書〔学生〕	・報告書を作成して提出 ※YOKE、国際機関、大学に提出
プログラム総括会〔大学〕 3月27日(木) 9月24日(水)	・ボランティアセンターが作成したプログラムの評価シートの記入。 ・研修の振り返りを大学担当者、参加学生でおこなう。 ・活動経験を生かして、次の課題を明確にする。

次に、プログラムの終了後に国際機関及び参加学生からのフィードバックの結果を紹介したい。国際機関へのアンケートはYOKEが作成し国際機関にヒアリングを行っている。「学生の機関や国際協力に対する理解が深まったと思うか」という質問については今回受け入れた6機関全てから「とてもよい」

という回答があった。「学生を受け入れることで機関に何かプラスになることがあったか」という質問に対しては6機関中5機関が「とてもあった」と回答し1機関が「普通」と回答していた。「学生の研修態度」については6機関全てが「とても良い」と評価し、報告会での発表及び報告書の内容の完成度については6機関中5機関が「とてもよく整理されていた」と回答し、1機関が「普通」と評価していた。

このように本プログラムは、国際機関からも評価されており、修了学生はフィリピンやイギリス、フランスの大学に留学したり、国際協力を専攻する大学院に進学するなど、活動を通しての学びが次のステップへと結びついている。しかし参加者が少人数に限定されてしまっているため、研修での学びの成果を他の多くの学生や社会等に還元していく方法はないかとボランティアセンターでは探っていた。このような課題へのアプローチとして、本プログラムを担当したボランティアセンターのコーディネーターが2008年春期の参加学生に働きかけを行った結果、プログラム修了学生と有志の学生が協力として6月に開催された戸塚まつり<sup>2</sup>でブース「つながる！知る！日本と世界」を設けることとなった。当日は、研修で学んだトピックであるアフリカの食糧危機への対応、アジアの都市での公害対策、在住外国人支援など地球規模の課題について、発信していくことになった。会場では上記テーマについて展示を行い、在住外国人についてのDVD上映と意見交換会を行った。DVDは活動を行ったメンバーの一人であるシネマ研究会の学生<sup>3</sup>が、神奈川県内の外国につながる青少年が住むコミュニティやインタビューの様子を撮影したものである。当日はDVD上映の他に交流会を開催し、外国にルーツをもつ明学生が自らの経験を話したり、在住外国人の支援に取り組む明学生や高校生たちが意見を述べるなど、さまざまな視点から在住外国人支援の現状と課題について、理解を深めることができた。

戸塚まつりでのこの活動は、国際協力や在住外国人支援に関心をもつ学生たちのネットワーク形成の場になり、その後戸塚在住の外国につながる子どもたちの学習支援を行うサークル「こ・こ・ろ」<sup>4</sup>が立ち上がるという波及効果がうまれた。学生たちがプログラムに「参加する」というスタンスに留まらず、そこでの学びを他の明学生や社会に還元すべく「Action」を起こしたことにより、地元戸塚で在住外国人の支援に取り組む学生の活動が誕生することとなった。

本稿では国際機関実務体験プログラムの実施報告、参加学生たちの事後の取り組み、さらに学内外に与えたインパクトについて述べた。今後は本プログラムを共催するYOKE、協力を得ている国際機関、横浜市内にある4大学と連携しながらプログラムの充実を図るとともに、学生たちの学びの成果が社会や学生たちに広がっていくようボランティアセンターとして支援を行っていきたい。

(糸井)

<sup>2</sup> 大学、学生、地域の三者で創る大学祭で、「国際」「福祉」「環境」を柱とした取り組みを行っている。

<sup>3</sup> かながわボランティアセンターより、本センターに「在住外国人が住むコミュニティ及び青少年へのインタビューの様子を撮影・編集に協力する学生紹介の依頼」があり、シネマ研究会の学生を紹介した。完成したDVDは「外国につながる青少年のエンパワメント」(企画：神奈川県社会福祉協議会当事者支援推進プログラム検討委員会 発行：神奈川県 制作：明治学院大学シネマ研究会)として発行されている。

<sup>4</sup> 「こ・こ・ろ」については、本書「明学グッズ・ボランティアファンド／学生チャレンジ賞」を参照。

## 海外ボランティア体験学習プログラム（通称：MOP）について

### 1. はじめに

本プログラムでは、海外でのボランティア体験を通じて、参加学生が日本や世界が直面する課題について考え、成長する機会を提供することを目的としている。具体的には、事前学習や事前課題から始まり、アメリカでのボランティア体験（アメリカ・ホープカレッジとの協働）に参加し、最終目標として11月の報告会の開催と報告書の作成をもって終了となる、サービス・ラーニングの構成要素を多く取り入れた体験学習プログラムである（単位認定はなし）。主たるターゲットは1、2年生であり、プログラム終了後に社会の様々な現場で活躍することを期待している。今年度は書類選考、面接を経て2名（英文学科2年男子1名、社会福祉学科1年女子1名）の参加を決定した。

### 2. プログラム概要

本プログラムは、本学と最も交流の古い協定大学であるアメリカ・ホープカレッジの協力のもとで実施しているもので、今年度で3回目となる。今年度の実施概要は以下の通りである。

日程	実施内容
第1回オリエンテーション：6/28@白金	プログラムスタートオリエンテーション 提出課題の指定：ボランティア学聴講とレポート、文献購読とレポート、自己紹介文
第2回オリエンテーション：6/28@浅草橋	ボランティア活動参加（特定非営利活動法人セカンドパーベストジャパン） ※活動後、振り返りとレポート提出
第3回オリエンテーション：7/26@白金	指定課題に基づくグループディスカッション（学生スタッフ、前回参加学生参加）
渡米（8/11～9/2）※8/17までプログラム担当コーディネーターが同行）	アメリカ・ミシガン州・ホランド（滞在：ホープカレッジ学生寮及びホームステイ） ・ ボランティア活動参加（スープキッチン、高齢者施設、フェアトレードショップなど） ・ 施設訪問（高齢者施設、病院、ホスピス、低所得者支援施設、教会など） ・ その他（日本語クラスティーチングアシスタント、開講科目の受講、フィールドトリップなど）
第4回オリエンテーション：10/8@横浜	帰国後ミーティングと報告会の打ち合わせ ※その後、個別カウンセリング実施及び10月～11月は合間を縫って予行練習を兼ねた発表とディスカッション
報告会（11/19@白金）	ボランティアファンド学生チャレンジ賞受賞団体中間報告会との共催 ※個人発表及び全体発表
報告書（12月）	執筆、添削期間を経て完成
第5回オリエンテーション（1月@横浜）	アンケートの提出と、最終総括

### 3. 今年度の成果と課題、今後の展望について—参加学生の様子と外部評価からの考察—

今年度は協働体制の見直しにより、前年度まで実施していたイギリス・レスター大学とのプログラムが中止となり、参加学生数が2名と少人数になったこと、前年度に続き、正課プログラムとしての位置づけ問題が解決できていないことから、構造的に学生たちにとっても参加しにくい条件であることから、約半年間にわたる学生のモチベーションの維持が懸念された。しかし、参加人数が少なかったことで逆にきめ細やかなコミュニケーションをとることが可能となり、プログラム担当者（筆者）を含めた3人の信頼関係は非常に強固なものになった。また、今回ようやくプログラム担当者が現地（アメリカ・ホープカレッジ及びホランド・コミュニティ）を訪問することができたことから、プログラムコンテンツの特色を「地域」、「高齢者福祉」、「キリスト教」と明確化することができ、現地スタッフとも今後の展望と課題について具体的に協議することができた。そして、アメリカでの後半2週間のプログラムを省いた全期間を通して学生に同伴でき、その都度振り返りやディスカッションを実施したことから、学生たちには自然とメモを取る癖が身につき、傾聴力、そしてアウトプット力は格段に上達した。そんな彼らは、自分の変化について、「大学に入学した1年間は無気力で、何もしなくて過ぎてしまった。2年生からは心機一転がんばろうと思ってこのプログラムに応募したが、これがきっかけで自分の殻が破れたと思う。また普段のレポートは出して終わりだけど、このプログラムは添削までしてもらえたり、全体においてとても鍛えてもらった。事前学習もとても役にたった。事前学習でまとめた内容やディスカッションの経験をもとに、アメリカで受けた講義の中で自分の考えを発言することができた(2年男子)。」、「国際交流センターが主催する海外プログラムは単位が取れるけど、2年生以上からしか参加できない。単位にはならないけど内容は充実しているし、1年生になった直後から参加できるこのプログラムは、私にとって大きな影響を与えました。この大学に入ってよかったと思えたり、授業や、大学生活に対する姿勢が変わりました(1年女子)」などと語った。それを裏付けるかのように、アメリカで大変お世話になったホープカレッジの教員から、「二人の変化には毎日驚かされました。海外に出ることは、新しく自分が生まれ変わり、自分を見つめなおしてまた日本で活躍できるきっかけになるのですね。ホランド・コミュニティにおいても、貴学の学生の評判は非常に高いですよ。」、また、日本での事前学習でお世話になったボランティア学の教員からも「このプログラムがきっかけなのか、1年生の女子学生が、秋学期(後期)に私の授業を取ってくれました。その授業は毎回様々なフィールドで活躍されている外部の方々をお呼びしてお話いただくもので、履修している学生も1年生から4年生まで幅広くいるのですが、彼女は1年生でありながら積極的に手を挙げて質問していますよ。この前はゲストにアメリカでの自分の体験や考えを話していました。」といった内容のフィードバックを頂戴した。また、このプログラムの集大成である報告会では、参加学生たちは、学長をはじめとする本学の教員らや在学生、他大学の学生や教員、地域の方々の前で、堂々と発表した。プレゼンテーションは、全体発表としてプログラムの概要を5分のオープニングムービーとしてまとめて二人で発表し、その後はそれぞれが個人発表を

行った。2年男子学生は「キリスト教とボランティア “What is volunteer?”」というタイトルで、キリスト教について具体的に知らないにも関わらずイメージだけで毛嫌いしていた自分が、アメリカでのボランティア体験や生活を通して、キリスト教の持つ力と魅力に気づき、キリスト教とボランティアの関係を、「教会」と「信条」から考察して偏見から魅力へと変化した自身のキリスト教観を整理した。その上で、今回の変化を引き起こした要因は、「関心を持つこと」であったこと、今回の経験を通して日常の中において無意識に様々な境界線を作ってしまう可能性と危険性について訴えた。1年女子学生は、「海のむこうで拾ったモノ」というタイトルで、今回の訪問地であるアメリカ・ホランドと、本学の所在地である東京都港区の高齢者、そしてホープカレッジと本学の学生のそれぞれを取り巻く環境とボランティア意識について比較し、「老人力」と「学生力」の重要性を訴えた。そして、この二つの力が交わることによって地域が活性化していくのではないかと、そのためには学生たちが「学生力」をあげることが重要であることを提案し、自身についても「学生力」を向上させるための抱負を発表した。このように、学生たちは自分たちの体験と経験を、自身の言葉で力強く紡ぎ、発信できるようになっていた。来場者アンケートからも、「クオリティーが高く驚きました。ただ外国に行くことは誰でも出来るけど、ここまで吸収してアウトプットできるのは、正直凄いと思いました」、「パワーポイントがきれいにまとめられていた。自分と同年とは思えなかった。立派な発表だった」、「無関心ではいけないこと。今の時間を大切にして貴重な体験をすること。両方ともに納得できて、関心をもつことができました」、「とても濃い体験をよくぞここまで簡潔にまとめあげたなと感動しました」、「自分も一歩踏み出せない1人だと思った」などの反響を多くいただいた。これらはこの半年間のうちのほんの一部の紹介であるが、このプログラムの到達目標として目指した、「参加学生たちが、思考力、行動力、発信力、コミュニケーション力、語学力などの様々な社会現場で貢献できる基礎的な総合力を身につける」機会提供の役割と、教育効果の役割を果たしえる手ごたえと確信を得ることができたと考える。

以上から、本プログラムは「学生の、大学生生活の充実のきっかけと一助となる」、「学生の基礎的社会的力の養成が可能であり、学生の潜在的な可能性を引き出すことができる」、「参加学生だけではなく、他の学生に及ぼす peer education としての役割も果たすことができる」といった意義があると考えられる。また、協働パートナーであるホープカレッジは、同じキリスト教を教育理念の礎とする大学で、校風や学生の気質など雰囲気が本学と非常に似ていること、また、大学の所在地の地域性や雰囲気（ホランドと港区白金）も非常に似ていること、ボランティア活動にも活発に取り組んでいることから、本プログラムのコンテンツと構成を、本学の地域性、学生の特色、建学理念といった、本学の特色を存分に取り入れ、反映させることが可能である。このような現状を踏まえた上で、今後は学生が参加しやすいような構造的課題の解決と、学内評価の確立と学生周知の促進のための、正課プログラムも視野に入れた位置づけの明確化の問題について、大学全体レベルでの早急な検討と結論が望まれている。 (李)

## スマトラ島沖津波支援「タイ・スタディツアー」の考察

スマトラ沖津波「タイ・スタディツアー」は、活動にあたって協力を得ていたタイの NGO「チルドレンファンデーション」が支援地タブタウン村から撤退したことに伴い、2007 年度をもって活動を終了し、2008 年度はこれまで3年間の活動のまとめと考察をおこなうこととした。総括の作業として、3年間の被災地の変化、現地での活動、タイ・スタディツアーから生まれたもの、次回への課題を考察、分析するワークショップを筆者と参加学生<sup>5</sup>とでおこなった。一方、筆者は参加学生へのインタビューを通してタイ・スタディツアーへの参加による学びと成長を整理した。これらの総括作業のまとめとして、報告書「3年間の『タイ・スタディツアー』を振り返って」が今年度中に発行される予定である。

ここでは総括作業を通して、明らかになった「タイ・スタディツアー」の意義と残された課題を簡単に記したい。被災地タイでは、学生たちはタイ政府から支援が届きづらい少数民族モーケンの集住地域で、津波とその後の混乱から生じている精神的な負担が緩和されることを目的として、子どもたちとの交流と遊びの活動に取り組んだ。年に1回であっても3年間継続的に活動を続けたことにより、村の子どもたちとの信頼関係が築かれ、住民たちは学生の訪問を待ち望んでくれるようになった。一方、本学の協定校であるタマサート大学では、本学の学生たちが日本の地震や津波への取り組みについての報告をおこなった。学生たちは災害支援の専門家ではないが、子どもたちと年齢が近いことを生かした遊びのボランティアは文化や言葉の壁を超えやすいこと、自分たちの知っている初歩的な地震や津波への備えの知識や経験を伝えることであっても、タイ社会に役立つことが分かった。

参加学生たちは、タイでの経験をボランティア活動やゼミでの研究、進路選択に生かしていった。例えば、スマトラ沖津波と新潟県中越地震の両方の被災地に赴き、活動をおこなった学生たちは、2004年12月と2007年7月の2度の地震で打撃を受けた新潟県中越地域の人たちを音楽によって元気づけたいと考え、明学生やタマサート大学からの留学生によびかけて、2007年12月にコンサートを開催し、復興の困難に立ち向かう人々を応援した。タイでコミュニティづくりの重要性を学び、まちづくりの研究をおこなうゼミで勉強を重ねて大学院進学を目指している学生もいる。タイで子どもたちが食べ物を喜ぶ姿を見て、食品会社への就職を決めた学生もいる。

このように意義があった一方、課題もある。遊びの準備が不十分だった為に、現地で失敗してしまった場面があったこと、タイでの活動後に現地に行った学生だからこそ気づく視点を発展させた、息の長い活動づくりまで至らなかったことは、改善すべき点として捉えている。現在の段階ではタイや災害被災地での活動は具体的に予定されていないが、将来的には津波被災地での経験やタイとの人的つながりを生かした活動が展開できるよう、引き続き努力をしていきたい。

(糸井)

---

<sup>5</sup>学生の半数近くは大学を卒業していたので、在校生とワークショップをおこなった。卒業生については、適宜コーディネーターや在学生在がヒアリング等をして協力を得た。

## アメリカ NPO ボランティア 体験学習プログラムについて

今年度で4回目の実施となり、サービス・ラーニングの要素を取り入れた形態での実施は3回目となる本プログラムは、「貧困」「マイノリティ」をテーマに、文献購読、フードバンクでのボランティア活動参加、講義と、それぞれレポート作成及びグループワークなどの事前学習を経て、アメリカ西海岸のサンフランシスコ、バークレーで共同生活を送しながら、現地 NPO でボランティア活動に参加する。アメリカではボランティア活動だけではなく、カリフォルニア大学バークレー校やサンフランシスコ州立大学でのクラス参加や各種学習のフィールドトリップ、英会話レッスン、毎日の振り返りや評価ミーティングなども行い、帰国後は、報告会での発表と報告書作成を通じて、参加学生が得たそれぞれの「学び」を学内にフィードバックする。

本プログラムは、以上のような約半年間の国内外における過程を通して、参加学生たちが思考力、行動力、発信力、コミュニケーション力、語学力などの様々な社会現場で貢献できる基礎的な総合力を身につけることを目指しており、プログラム終了後に社会の様々な現場で活躍することを期待している。なお、前年度に続き、アメリカでの受け入れは日本太平洋資料ネットワーク（以下 JPRN）の事務局長である野房あかね氏に依頼しており、野房氏の協力を得ながらプログラム担当者である筆者（以下筆者）が全体をアレンジしている。

当プログラムは実施期間が12月から6月であるため、本書でプログラム全体を報告することができないが、本稿では1. 2007 度プログラム（2007 年12月～2008 年1月の内容については「明治学院大学ボランティアセンター報告書第4号（2007）」参照、本文では2008 年2月～2008 年6月までを報告）、2. 2008 年度プログラム（2008 年11月～2008 年1月現在までを報告）について扱う。

### 1. 2007 度プログラムについて

事前課題や事前準備を経て、参加学生は2007 年2月14日、アメリカ、サンフランシスコ・バークレーへ向けて出発した。そして2007 年3月1日に全員が無事に帰国した。そして早速3月8日に帰国後ミーティングを行い、参加者全員で行うグループ発表について議論し、学生たちでテーマ、方法、役割分担、報告会までのタイムスケジュールについて決めた。その後、報告会の準備を進めながら、筆者が参加学生たちと個別にカウンセリングを行った。これによって、現地での様子を確認しながら客観的に整理し、報告会の個人発表で取り上げる内容の焦点を絞り、報告会までのタイムスケジュールを具体化した。こうして報告会に向けた方向性を整理したのち、学生たちは5月の連休明けまで個人発表の準備に励んだ。プレゼンテーションの経験がない、パワーポイントを使うことも初めてという学生もいたが、彼らが最も格闘したのは、不特定多数の聴衆に対して、限られた時間内に自分のオリジナルな考えを届けるプレゼンテーションを作れるかという点だった。しかし何度も試行錯誤を重ねながら各々が準備に取り組ん

だ。そうして4月19日、初めて予演会を行った。緊張と失敗の連続の中で自分の発表を行い、仲間たちからアドバイスをもらい、そして自分もアドバイスをするために必死に傾聴する、という時間は、学生たちにとって何よりのPeer Education になったと考える。こうして皆で新たな課題を明らかにし、共有することで、次のステップであるグループ発表に向けた準備を始めた。在籍学科学年、校舎もバラバラの中で全員が主体的に時間を調整し、捻出した。5月の連休明けには、毎週末全員で予演会を行った。こうした準備を経て、5月22日、学長をはじめ、学内の教職員や学生、学生の家族や友人たちを聴衆に迎えた報告会を白金校舎で行った。今回も、学生たちの着眼点は非常にユニークだった。女性ホームレスの事例を通して、参加者中唯一の男性だった自分を事例にマイノリティ問題を考察し、気づきの大切さや意味について提案した学生、在日外国人問題を犯罪率から考え、「みんなちがってみんないい」という金子みすずの詩の意味を考察した学生、パークレーの障害者自立運動と日本の障害者自立運動について調べ、当事者が声をあげていくことと、周囲の気づきと理解の重要性について考察した学生、今回のプログラムを通じた出会いを通じた自分自身の成長について考察した発表、このプログラムで初めてNPOに出会い、「無償」以外の「意味」を考察した発表、そもそもボランティアとは何だろう、と本学の建学の精神であるDo For Othersとも併せて考察し、視野を広げる、世界を広げるという側面からボランティアについて語った発表、自分の住む街について調べ、社会の一員としての自覚と行動について考察し、本学の学生に向けたメッセージを提案した学生など、多岐にわたった。全ての発表において共通したのは、程度の差はあるものの、全ての学生が「足で稼いで」創りあげた発表であるという点である。全員が自分の言葉で発信する重みと責任を感じ、それが発表製作の過程で行動として現れたと考える。それは筆者のもとへ何度も何度も足を運んだり、紹介してもらった役所の方やNPO代表の方にアポイントを取ってインタビューに訪れたり、NPOの活動に参加した上でアンケートをお願いしたり、明学生を対象に調査をしたり、いくつもの文献を調べたり…しかしそれらの「材料」を、9分間という発表時間にまとめる難しさにおつかり、パワーポイントを何度も作りなおしたり、結局その材料を全て使うことができなかつたり…。学生たちは、このような過程でいくつもの現実を学んだと思う。今回の報告会ではこれらが一番の成果であると考えているが、一方で、プレゼンテーション後までの余裕がなかったため、ほとんどの学生たちは質疑応答の際に頭が真っ白になって答えることができなかつた。しかしそれも含めてプログラムであると考えている。実際、学生たちはその悔しさをバネに、白金校舎での報告会のリベンジを果たすべく、横浜校舎で学生主催の報告会を開催した。そこでも、会を主催し、運営する難しさと魅力について学ぶことになった。報告会終了後は、報告会で個人発表した内容をもとに、報告会までの経験や学びなども新たに加え、執筆要綱にしたがって報告書を執筆した。一瞬で終わるプレゼンテーションと違い、文書として残る形での表現方法に再び学生たちは葛藤したが、添削を経て報告書が完成した（報告書は別冊『2007年度アメリカNPOボランティア体験学習プログラム参加学生による報告書』を参照）。こうしてようやく約半年間にわたるプログラムが全て終了した。

当プログラムの「本番」は渡米後、つまり「体験後」であると位置づけているが、プログラム自体は、プログラム終了後に参加学生たちが実際の社会現場に出かけていくことを期待している。この点から、今回の参加学生の中で特筆すべき例がある。今回の参加者に男子学生は1名しかいなかったのだが、彼は参加当初から、ジェンダーバランスと葛藤しながら、自身の成長を目指してプログラムに参加してきた。そんな彼が、5月の報告会を控えた4月、報告会の相談の際に、5月25日に白金校舎近隣で開催されるシロカネ・ストリートフェスタ<sup>1)</sup>を偶然知った。帰国後から高い志を持ち、Social Actionについて常々考えていた彼は、フェスタに参加したいと考えたのだが、彼は横浜校舎で4年間過ごす国際学部在籍の学生だった。そこで手作りキャンドルを販売するブース出店として参加することを考えた。自らフェスタ主催団体の志田町倶楽部の学生チーム運営委員になり、白金地域の方々、白金校舎在籍の学生たちともコミュニケーションをとりながら、横浜校舎での活動を展開した。彼が実行した Social Actionの説明として、彼が「MG natural」<sup>2)</sup>で執筆した文を紹介する。

私たち「つながりろうそく倶楽部」は、留学生を含む明学生から白金高輪地区へ、最終的にブルキナファソとの間に「つながり」という意識のネットワークを作り上げることを目的として出店しました。今回の出店に際して、キャンドルの原材料となった蠟は寺社やホテル等から無償寄付していただき、また無償で多くの学生が企画・製作に関わりました。ブルキナファソの平均識字率が世界でも最下位に属し、子どもたちが3人で1人分の文房具を共有している現状を憂慮し、利益は彼らへの文房具費用として寄付しました。私たちの活動により、ブルキナファソへの関心が少しでも高まり、日本一ブルキナファソ間の新たなつながりができればよいと思います。

前年度はプログラム終了後にこのような動きがあったが、今回はプログラム中に、しかも一番忙しく困難な時期での挑戦だった。今回の例は学生自身にとっても自信につながったと思うが、彼の行動は、限られた時間内で今まで誰も越えることができなかった校地の距離を越えて、ここまでできるということのを他の学生に実証した大きなインパクトだった（実は彼は別の団体の実行委員も同時に引き受けていた）。ボランティアの語源について火山（Volcano）に例える場合がある。若い学生の中で活火山のように自らの中から沸き起こる「自由で自発的な社会貢献活動」を通して、社会の未来と希望を支える一助として活躍してくれることを期待している。その踏み台として当プログラムはありたいと考えている。

## 2. 2008年度プログラムについて

プログラムの継続性と発展性という点から、前年度はプログラムの位置づけと役割を明確にするという構造的問題を解決することが、検討課題としてあがったが、ようやく今年度、大学として正課プログ

<sup>1)</sup> 詳しくは本書「I. 2008年度活動報告 白金校舎ボランティアセンター報告」を参照。

<sup>2)</sup> 詳しくは本書「I. 2008年度活動報告 白金校舎ボランティアセンター報告」を参照。

ラムとして位置づけることが可能かどうかという点から議論してもらえる場(学長の諮問による委員会、委員長はボランティア担当副学長)が立ち上がった。しかしながら、すぐに方針が決定するわけではない。プログラムの費用的な問題とそれに伴うアメリカ滞在期間短縮とプログラムの質の低下に対する懸念と、授業のような強制力がない状況での参加者たちのモチベーションを約半年間維持する難しさ、学部と在籍校舎が異なる学生たちのミーティングや予行練習会などの場所と日時のアレンジと確保が難しく、何よりもこのような不安定な予定の中でのプログラム進行は参加学生自体が参加しにくい状況となっている問題がある、といった具体的な課題に対して、今年度は現場担当者レベルで工夫して乗り切らざるを得ない状況となった。そこで、前年度までの成果と課題を改めて振り返り、新たに内容を再編成した。まず、参加学生たちが負担できる費用の面から、現地でのプログラムのクオリティを落とさず、前後の日本でのプログラム内容との相乗効果の点から過去の実績と経験をもとに検討を重ねた結果、今回は参加者を15名とし、アメリカ滞在期間を3週間に設定した。前年度に続く学生たちへの周知問題、応募状況の懸念に対しては、広報期間を十分取り、白金・横浜ボランティアセンターにおいて、スタッフが来室する学生一人一人に丁寧に説明をしたり、ボランティア学の授業でアナウンスの機会を頂戴したり、といった地道な広報活動を展開した。また、2006年度、2007年度の参加学生が、学内説明会においてプレゼンテーションを行ってくれたおかげで、説明会を3回開催することができた。また、2007年度参加学生たちがプログラムの概要と魅力について5分のムービーを製作してくれたおかげで、説明会のみならず、日常のボランティアセンターでの広報手段としておおいに活用させてもらった。その甲斐あって定員以上の応募があり、書類選考とグループ面接を経て15名の参加者を決定した。内訳は1年生が3名、2年生が12名である。今年度は自分の意思をしっかりとっており、向上心旺盛な学生が多い印象を受けた。肝心のコンテンツについては、今年度は「貧困」「マイノリティ」をプログラム・テーマとしてより明確に掲げた。それによって、渡米前の事前学習内容をピンポイントに絞り、アメリカで参加するボランティア活動内容も事前学習内容にリンクさせることができ、全体の流れを統一できた。事前学習の充実化にあたり多大なる協力を賜ったのは、前年度からお世話になっている、NPO法人セカンドハーベストジャパンである。具体的には、2008年に発刊された図書(「フードバンクという挑戦—貧困と飽食のあいだで」大原悦子著、2008岩波書店)を指定文献として文献購読とレポート課題を設定した上で、団体理事長であるチャールズ・E・マクジルトン氏と事務局長である和田裕介氏を講師に招いた講義を設定した。文献で予習をしていたおかげで更に情報がインプットされ、質疑応答を通して、机上の学びをより自分のものにすることができた。その上で、次は実際のボランティア活動に参加させていただいた。寄付された食品を実際に手にとって配給できるように準備するところから始まり、それを上野公園で5~600人の人々に配り、後片付けまで参加させていただいた。更に、ご好意でチャールズ氏を交えた振り返りまで設定していただけた。そしてこれら3つの事前学習に対してレポート作成(提出物は全員で共有)し、これらを題材にグループワークを行った。そこでは3つのグループに分かれて

ディスカッション、まとめ、発表、質疑を受ける、といったプロセスを経験してもらった。そのおかげで、学生たちは「まだ1ヶ月しかたっていないけど、とても充実しています」、「これまでボランティアをする時どうしても相手に何かをしてあげたいという厚かましい思いを抱いていたと思うが、そんな考えを持つこと自体間違いで自ら壁を作ってしまったと思った」、「自分がいかに狭い環境で生きてきたのか、メディアを通して“貧困”を知っているつもりでも何も分かっていなかったことを思い知らされた。社会制度の充実を望むだけでなく、自分の出来るところから支援を続けたいと思った」、「色々注文やクレームを言うホームレスの人たちに理解できず苦しい思いもしたが、感謝されたいと思っている自分に気づいた。そんな気持ちはやってあげてるという気持ちからくるものだし、対等な関係が崩れてしまうとと思った」、「ボランティア当日は天気が良かったが、雨天決行とされていた理由がわかった。あれだけの人が待っていたら簡単に中止できないと思った。セカンドハーベストジャパンはこのような人たちの命綱といえるだろう」、「平等に配ること、ボランティアが直接手渡すことが大切だと思っていたので、“好きなものを3つ持って行ってください”という方法に戸惑ったが、チャールズさんの“選択できる幸せ”という考えを聞いて目から鱗だった」、「一人よりもの人々との交わりの中の方がたくさんのアイデアをもらえることが分かった」、「自分の考えをまとめ、発信する難しさを知ったが、そうできることを目指したいと思った。皆（他の参加学生たち）すごい。刺激をもらってる」など、具体的でいきいきとした言葉を紡ぎだしている。この流れを今後、アメリカの野房氏に託すが、今回のアメリカでのプログラム内容も、フードバンクやスープキッチンに絞っており、それをベースにバークレーの多様な社会の形、人々の形を目の当たりにしてもらうように設定している。本稿を執筆している現在はプログラム開始から1ヶ月半程度で渡米を控えている状況だが、前年度以上に手ごたえを感じている。参加学生たちの可能性を引き出せるよう全力でサポートしたいと考えている。

#### 2008年度アメリカNPOボランティア体験学習プログラム概要

日程	実施内容
第1回オリエンテーション：11/29@白金	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ プログラムスタートオリエンテーション</li> <li>・ 課題の伝達               <ul style="list-style-type: none"> <li>① 指定文献「フードバンクという挑戦—貧困と飽食のあいだで」大原悦子著. 2008, 岩波書店, の購読とレポート提出)</li> <li>② 自己紹介文提出</li> </ul> </li> </ul>
第2回オリエンテーション：12/15@横浜	ゲスト講演：特定非営利活動法人セカンドハーベストジャパン（講演後レポート提出）
第3回オリエンテーション：12/20@浅草橋	渡米前ボランティア活動への参加と振り返り：特定非営利活動法人セカンドハーベストジャパン（活動後、レポート提出）
第4回オリエンテーション：1/10@白金	提出レポートに基づくグループワーク（ディスカッションと発表）

第5回オリエンテーション：2/5@横浜	旅行会社オリエンテーション、その他最終準備状況の確認など
渡米（2/12～3/5）	アメリカ・カリフォルニア州・サンフランシスコ/バークレー地域 （滞在：Berkeley YMCA で共同生活） <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 2班に分かれてのボランティア活動参加（スーパークitchen/フードバンク）</li> <li>・ 全員参加のボランティア活動（植樹ボランティア）</li> <li>・ 自主学习（ゴスペル参加、NPO 突撃訪問、キャンパスインタビュー体験）</li> <li>・ NPO イングリッシュクラス（全4回）</li> <li>・ サンフランシスコ州立大学のクラス参加（Ethnic studies）</li> <li>・ 各種学習的フィールドトリップの参加</li> <li>・ 毎日のボランティアグループミーティングと週末全体ミーティングの開催と運営</li> </ul>
第6回オリエンテーション：3/24@未定	帰国後ミーティングと報告会に向けた打ち合わせ
第7回オリエンテーション：3月の土曜日	帰国後ボランティア活動への参加と振り返り：特定非営利活動法人セカンドハーベストジャパン（活動後、レポート提出）
3/24～4/17	個別カウンセリングと報告会個別発表準備期間
第8回オリエンテーション：4/18@未定	報告会個人発表予演会およびグループ発表の打ち合わせ
4/20～5/15	グループ発表準備期間
第9回オリエンテーション：5/16@未定	報告会全体予行練習と最終打ち合わせ
5月第5週@白金	報告会
6/1～6/8	報告書初稿提出期間
6/1～6/19	報告書添削期間および完成
第10回オリエンテーション：7/4@未定	最終総括

(李)

## ソニーマーケティング学生ボランティアファンドについて

このファンドは、大学生の社会参加への第一歩となり、また、社会をより良くしていこうとするリーダーシップの芽生えとなるようなボランティア活動を支援することを目的とし、ソニーマーケティング株式会社の提案により、日本初の全国の大学生ボランティアを対象とするファンドとして2001年から始まった。当初より本学ボランティアセンターが事務局を担当させていただいている（ソニーマーケティング学生ボランティアファンドのホームページ [www.sony.co.jp/v](http://www.sony.co.jp/v)）。

第8回目の募集となった今回は、前回に引き続き A コース（助成金 25 万円を上限）および B コース（助成金 10 万円を上限。こちらのコースは、新たにボランティア活動を始めようというグループや比較的费用のかからない活動規模の小さなグループにも助成をしようという考えのもと、第6回から設けられている）を設定し、2008年10月1日～11月14日に募集を行った。応募総数 69 団体の中から、審査の結果、A コース 17 団体、B コース 10 団体、合計 27 団体が助成対象として決定された。大学別には、国立大学 13 大学、公立大学 4 大学、私立大学 25 大学の合計 42 大学からの応募となった。分野別の応募状況としては、これまでと同様に、子ども、地域コミュニティ、教育をテーマとする活動が多数を占め、昨年まで多かった環境は減少し、今回初めてボランティア振興・啓発が1位となった。また、活動地域としては国内 57 件、海外 13 件であり、海外の大半が東南アジアとなり、フィリピン、タイ、ベトナムなどが多いが、1件だけアフリカもあった。本学からも A コースで2団体、B コースで3団体が助成対象として選ばれている。

このあと 2009 年 7 月に報告会が行われる。助成団体の学生が全国から一堂に会し、いくつかの団体による活動報告のほか、グループに分かれての分科会、懇親会を行う予定である。各団体から活動報告をあげてもらい、それらをまとめた報告書も当日配られる。前々回の報告会から導入した分科会は、助成団体の学生が意見を交わしあい刺激を受けあう良い機会となっており、過去に参加した学生からも好評であった。また、前回の報告会では助成団体のほか応募したにもかかわらず助成に至らなかった団体にも参加を呼びかける試みを行った。今回の報告会も、情報交換と交流の場であることはもちろん、参加した学生にとって、より実りあるものとなるよう準備を進めていきたい。（武村）

## 聴覚障がい学生支援について

明治学院大学には聴覚に障がいのある学生が在籍しており、聴覚障がい学生が十分な大学生活を送ることができるように、大学では関係各部署が協力し必要な支援を行っている。ボランティアセンターでは、今年度もノートテイクコーディネーターに来ていただき、授業での情報保障を中心に、以下の聴覚障がい学生支援に取り組んだ。

### 1. 聴覚障がい学生本人への支援

本学の情報保障には、①手書きによるノートテイク、②パソコンノートテイク（以下、PC ノートテイク）、③手話通訳、④教材（ビデオなど）の文字起こし、がある。ボランティアセンターでは、聴覚障がい学生（以下、利用学生）からの申込みを受けて、ノートテイクや手話通訳者の募集を行い、希望者に登録してもらい、授業のほか入学式や卒業式、各種オリエンテーションなどへ通訳者派遣を行っている。今年度の登録者数は学生 65 名、地域要約筆記者 10 名、地域手話通訳者 9 名であり、サポートを必要とする利用学生は 3 名であった。利用学生 3 名のうち主な履修校地が白金校舎となる学生が 2 名、横浜校舎が 1 名であり、春学期にノートテイクを必要とする科目数は 48 科目（内訳は白金 15、横浜 23）、秋学期は 26 科目（内訳は白金 12、横浜 14）であった。1 回の授業に 2 名のノートテイクが必要なおこに加え、利用学生が情報保障を必要とする授業時間と通訳者の都合が必ずしも合致しないことから、特に春学期はノートテイクの確保に困難が伴った。加えて、専門科目に関しては、ノートテイクをする上である程度の専門知識が必要となる。秋学期には利用学生と同じ学科の上級生や大学院生への呼びかけを学科を通して試みたところ、当該科目を履修したことのある学生が登録してくれた。とはいえ、人数としてはまだまだ十分とは言えず、今後さらなる工夫が必要である。

また、ノートテイクを確保するという点でボランティアセンターの支援も万全とまではいかないことから、すべてをセンターに頼るのではなく、友人や同じ授業を履修している学生などにノートテイクを依頼してみるなど、利用学生の自発的な働きかけも大切であり、今年度はコーディネーターとの個人面談などを通してこれらのことを利用学生に伝えてきた。単なる支援にとどまらず、こういった利用学生本人への助言や指導も含めた育成もセンターとしての役割としてとらえ、今後も継続して行っていきたい。

なお、今年度は学生向けに PC ノートテイク講座を実施し、講座を受けた学生が春学期の途中から地域 PC ノートテイクとペアになり、実際の授業で PC ノートテイクを行った。来年度は、さらに人員を増やし、学生同士で PC ノートテイクを行えるよう進めていきたい。

### 2. ノートテイクの育成

今年度も外部から講師を招き、5 月と 10 月に白金・横浜それぞれの校舎で初心者向けノートテイク

養成講座を実施した（受講者数は合計45名）。それぞれ2日間連続受講形式となっており、2日間の受講時間は合計6時間となっている。養成講座に参加できなかった学生には、コーディネーターが後日個別研修を実施した。養成講座や個別研修を経た初心者学生には、初回は授業でノートテイクを見学、2回目から実際にノートテイクに入るなど段階的なマッチングを行うようにした。また、コーディネーターがノートテイクの入っている授業になるべく2回は入るようにして、それぞれのノートテイク生にアドバイスを行った。経験者が少ない中でノートテイク生を配置し任せなければならない現状では、こうしたきめ細やかな対応がノートテイク生の定着とテイクの技術向上につながっているといえる。

また、今年度からは、PC ノートテイク養成講座も実施した（受講者数は合計10名）。連続受講という形式や受講時間はノートテイク養成講座と同様とし、機材や専用ソフトのインストールなど情報センターの協力を得ながら、こちらも外部から講師を招き、6月に横浜校舎、11月に白金校舎で1回ずつ行った。PC ノートテイクは、手書きによるノートテイクに比べてより多くの情報保障を行えるといわれているので、これからも継続して進めていきたい。

なお、各学期に2回ずつ、利用学生からは「利用学生報告書」、通訳者からは「通訳者報告書」を提出してもらった。これは、実際に通訳に入った、あるいは通訳を受けた感想や反省、要望や質問などをそれぞれの授業について書いてもらうもので、コーディネーターやテイク生に関してのアドバイスをするうえでの参考資料となっている。次年度は、報告書の提出だけでなく、ノートテイク生の声をきける機会を定期的に設定し、ノートテイクの技術向上にも力を入れていきたいと考えている。

### 3. 聴覚障がいへの理解を深めるための啓発

今年度も『聴覚障がい学生サポートの手引き』を、教員用と本人・通訳者用の2種類作成し、授業担当教員、利用学生が所属する学科教員、利用学生、通訳者、関連部署に配布した。

また、利用学生と通訳者、通訳者同士が交流する場として、7月と1月に交流会を設定した。1月の交流会では、在学中にノートテイクや手話通訳の場で活動した本学卒業生を招き、聴覚障がい学生のサポートについて話してもらうなど、聴覚障がいへの理解を深める機会を持った。

本学の聴覚障がい学生支援は、学生が学生を支え、共に学ぶという姿勢を大切にしながら続けられてきた。そして、それを支えてくださっているのが、地域の要約筆記や手話通訳の方々であるといえる。これからも地域の方々のご協力を得つつ、学生を継続的に育成していけるような仕組みづくりを心がけていきたい。また、本学では、近年他の大学に見られるような「障がい学生支援室」という組織体制が整えられていない。聴覚に限らず障がいを持つ学生を受け入れサポートしていくためには、特定の部署だけでなく学部学科を巻き込んだ全学的な体制が不可欠といえる。ボランティアセンターとしては、学生が学業に専念するうえで障がいを持たない学生と同じスタートラインに立つためのサポートが十分に行えるよう、今後も努力を続けていきたい。 (武村)

## 白金校舎学生スタッフ活動報告

2008年度の白金学生スタッフは変化を起こしながら、これまでの学生スタッフならではの様々な、しがらみを打破してきた1年だった。

### 【時系列】

2007年9月～12月の2008年へ向けたチーフ交替の準備期間に学生スタッフの中で毎年同じように繰り返される問題（学年・学部による校地の違い・各学生スタッフの興味・関心の違い等）と先輩が行ってきた活動（詳しくは「ボランティアセンター報告書第4号 白金校舎学生スタッフ活動報告」を参照）を引き継いだ。今までの学生スタッフの活動に対して疑問を感じていた私は、2008年度白金学生スタッフのチーフとして、現状を少しずつ変えていこうと大勢いる学生スタッフの組織の中でボランティア参加の呼びかけや学生スタッフの活動の方針（情報発信・つながり・ボランティア経験）を学生スタッフ内でのアンケートから提案したが、学生スタッフとしての意識やモチベーションの共有など、うまくいかず、活動は次第に形骸化し、活動も週に1回のミーティングや以前からの活動の引継ぎのみとなってしまった。

そこで2008年4月から新しく登録した学生スタッフ（新入生+4年生）と前年度から登録していた学生スタッフの中で現状の活動に対して問題意識を感じていた人で協力して、今までの学生スタッフと違う新しい活動を目指した。その過程で学生スタッフ中心の6つのプロジェクトが立ち上がった（プロジェクト毎の詳しい報告については本書「白金校舎学生スタッフ活動報告」を参照）。新しい活動とはそれぞれの団体が自己完結していることなく学生×大学×外部機関との協働による活動である。具体的には、それぞれの代表を中心として活動していくが、互いのプロジェクトを全員が理解・協力しており、一般学生に対して勧誘することが出来るという“一蓮托生”という言葉が似合う団体運営スタイルで活動した。そのために毎週のミーティングで情報の共有を行い、学生スタッフ内で興味を持った人に対してもいつでも参加出来るようにした。

秋学期からは、夏休みの合宿で議論したことを踏まえ各プロジェクトを進行した。白金・横浜の両校舎で開催した「Do For Others サークル説明会」や明治学院共通科目「ボランティア学3」といった機会を通じて広報したり、メルマガや学生専用ポータルサイトポートヘボン、立て看板など、明学生に対して多角的にアプローチした。学生スタッフ内では毎週定例のミーティングを従来の教室から和室へ変更し、また定期的に各自ランチおかず一品持ち寄りのスタイルも行った。この場には李コーディネーター、教養教育センター猪瀬先生の参加もあり、学生×教職員が同じ目線でコミュニケーションを取るということを行うことが出来た。これらの過程で、白金学生スタッフ内では次第にプロジェクトの参加を通して、一般学生と地域をつなぐ活動を展開していく人、個人的にボランティア活動に参加する人に分かれていった。

## 【キーワード】

①仲間 —— 今年度の活動において学生スタッフは仲間の大切さを実感したと思う。活動は自由と言われてきた従来の学生スタッフは、学生スタッフとして活動するかどうか個人自由だった。そんな状況で何かしたいという思いから自分たちで“現場”を創り、そこで一緒に活動してきた仲間は、時にぶつかり、言い合いになることもあったが、本気で活動するからこそお互いにそのような関係が成り立ったのではないと思う。また、人が増えることによって感情も様々になったが、その中で馴れ合いにならない、ちょうど良い距離感に気づくことも出来たのではないと思う。ボランティアセンターには毎日誰か居て、情報共有から身近な相談、夢まで語り合える仲間が出来たことは2008年度の大きな変化ではないかと思う。

②今出来る最大限で最高なこと —— 各プロジェクトにおいて、人・物・金・情報・時間のそれぞれが限られた中で、その時に出来る最高のものを創り出す事を目指して活動してきたと思う。資源があるだけ良いものが出来ると思うが、そうではなく、その時にある資源を最大限に有効活用しプロジェクトを創り上げたことに意味があると思う。このような価値観は、実際にプロジェクトという“現場”を持って運営していく中で、外部の人との協働からその意識を感じ、自分のことをマネジメント出来るようになったからではないかと思う。

③素直な心・謙虚な気持ち —— 学年・学部・バックグラウンドがそれぞれ違う人達が交わり、新しいものを創ってきた中で、ポジティブで楽しいことを想像し、わくわく出来る素直な心を持ちながら活動をしてこれたと思う。頭の中で考えているだけでなく、時間があれば実際に現場に行ってみて自分の目で見てみるというフットワークの軽さも大切にしてきた。実際の活動においては、各プロジェクト、各スタッフそれぞれ問題にぶつかり、その度に失敗やつらい思いをしてきた。そのような時に強情になるのではなく、メンバー同士での相談や、教職員や外部団体の方からのアドバイスを受けることによって成功や乗り越えるきっかけを得たことから、相手に対する謙虚な気持ちを持つことの大切さにも気づけたと思う。

## 【今後の展望】

今年度は、「守・破・離」という段階の中で、学生スタッフ自身の主体的な活動を行うことが出来るようになった1年だった。ボランティアセンター学生スタッフの活動を先輩の代から行われ続けたものを引継ぎ、教えられた主体的な活動を「守」る段階。それを繰り返す中で行われてきた活動が現状のニーズ・自分たちのやりたいことと不一致であること気づき、学生スタッフの主体性を大切にして、これまでの活動を「破」り学生スタッフと様々な人達の協働による団体を立ち上げ、現場を創り上げた変化を遂げた段階。学生スタッフ自身が現場を運営することで、主体的な活動ということ意識しなくても行える「離」の段階。これらを経て、結果は「学生スタッフの活動が活発になった。」というように理解出

来るかもしれないが、その結果以上にこれらのプロセスの中で経験した、「理論と実践の繰り返し」ということが、学生スタッフの活動が変化を遂げるために大切だったのだと実感した。これらの活動は、今年度だからこそ出来た学生スタッフの活動であると思うので、現状の活動が今後もずっと適していくとは全く考えていない。大切なことは、結果よりも実際に活動して変化していく過程で「理論－実践」のバランスを考えながら、流動的で、その時々に適した変化をし続ける活動を行うことだと思う。

これらの活動を行う中で以前よりも学生スタッフの活動に興味を持ってくれる学生や、大学の教職員、また地域の人達との出会いが増えた。これは学生スタッフ自身の現場での活動から自分なりの言葉で学生スタッフの活動を説明することが出来るようになったためだと思う。そして、様々な人との出会いから学生スタッフの可能性にも気づくことが出来たと思う。今後もボランティアセンターとの協働パートナーの学生スタッフとして、「大学×地域×学生」をそれぞれ結びつけるときの、パイプ役として学生スタッフが活躍出来るのではないかと思う。それぞれが単体で自己完結の活動を進めるのではなく、協力できるときにはお互いの資源を持ち寄り、相乗効果を見込める活動が出来るのではないかと思う。その時に、協力できるきっかけを創ることが出来るのが学生スタッフになっていくのではないかと思う。

最後に、今後も学生スタッフ活動はさらに幅が広くなり、様々なバックグラウンドを持った人達が交わっていく場になると思うが、忘れてはいけないのは、おもしろい活動を目指し、常にわくわくする気持ちを持つことだと思う。なぜかという、これまでの学生スタッフの活動においてそれが一番難しかったことのように自身が感じたからである。その気持ちを大切にしていれば、自然とそこに集まる人も同じように共感してくれる人だと思う。限られた学生生活の中でしか行うことが出来ない活動であるので、楽しむ気持ちを大切に活動していくことを目指していきたい。

(白金校舎学生スタッフチーフ 3年 山田 純平)

## ベンチャーサークル合同説明会

ベンチャーサークル合同説明会が開催されるきっかけとなったのは、「自分の所属するボランティア団体では人員が足りない。でも自分たちの団体だけで説明会を開いたところでは人は集まらないだろう」というボランティア活動を積極的に行っている明学生の声であった。ボランティアセンターに出入りしている他のボランティア団体の人からも同様の声が上がリ、人員不足という問題は多くの団体が抱えている問題であることが分かった。そこで、どうしたら新しい仲間を獲得することができるか考えた。1つの団体で説明会を開いても人が集まらなくても、人員不足に悩む団体が一同に集まったら、人も集まるのではないだろうか。そうすれば、聴きに来る側にも、様々なボランティアの中から自分の興味のあるボランティアを見つけることができる、団体に所属する学生が直接プレゼンすることによって実際に活動を行っている学生の生の声を聞ける、直接質問もできるので、活動に参加しやすくなるというメリットがあるのではないかと考えた。このように、人員不足に悩む団体、聴きに来る学生側双方のメリットを考え、今回の合同説明会を企画することとなった。そして、共に新しい仲間を獲得すること、そしてボランティア団体との輪、連携の体制を作ることを目標とした。まずは、普段使用される“ボランティア団体説明会”という言葉に注目した。今までの経験の中で、ボランティアという言葉を出すことによってボランティアをするということに対する敷居を高くし、人を遠ざけてしまっていたように私たち自身が感じていたからである。実際にボランティア活動をしている人には敷居が高いなんていう印象はないのだが、今から始めようという学生にとってはマイナスポイントになってしまうのではないかと考えた。そこで、今回の参加団体はボランティアに留まらず、様々な活動をしている団体で構成したことから「ベンチャーサークル合同説明会」と名付けた。そして、説明会冊子にもこだわった。ただ単にやっている活動を書くのではなく、自分の体験談、学んだことを盛り込んだものにし、現場の声を伝えようとした。そこで各団体に原稿を依頼し、写真などを盛り込みながら、「見たい、読みたい。」と思えるものにしようと工夫した。結果、参加団体からもこの冊子は好評だった。実際には、各団体に「こういうものを書いてほしい」というこちら側の意図がなかなか伝わらず、製作には苦勞したが、説明会に来てくれた人が熱心に冊子を読んでいるのを見て、頑張ったかいがあったと思った。しかし、広報活動には悪戦苦闘した。広報手段としては、ポートヘボン(学内ポータルサイト)、ポスター、立て看板、ちらしを使用した。中々手が回らず説明会ギリギリになってしまったのが実状だった。今後の課題として早めの広報が大切だと痛感した。また集客人数についても課題が残ったが、今後定期的を開催することで説明会に訪れる人は増加していくと考える。活動を知ってもらい興味を持ってくれる人が増えることを願い、地道にこのような機会を増やしていくことが必要だろう。一方でこの合同説明会を開催して新しい仲間を獲得した団体が多数あった。そして、参加団体からは同じ様にボランティア活動を積極的に行っている人と知り合う良い機会になったという声も寄せられた。こうしたつながりを作る機会としても有効だと考えるので、今後も続けていければいいと思う。(心理学部心理学科2年 須賀 ゆきの)

## 研修合宿

2008年度春学期、多くの新メンバーが学生スタッフに加わったため、様々なプロジェクトを立ち上げることができた。しかし、プロジェクトを進めていく上で、ボランティアとして参加する立場とではなく、現場をマネジメントする立場の違いと難しさを感じた。明学生・学内職員・外部団体など様々な人たちが関わっている中、その人々の架け橋となり、社会の活性化を目指すことが学生スタッフの役割であり、プロジェクトの mission である。そこで、各プロジェクトの課題を共有し、問題解決の方法を模索することで、秋学期に本格的にプロジェクトを展開していくために研修合宿を行った。

研修合宿は9月7日から9日まで、川崎グランドホテルで行われ、13名の学生スタッフと白金ボランティアセンターのコーディネーターが参加した。内容は、学生スタッフたちとコーディネーターが事前に何度も打ち合わせをして企画した。

研修合宿1日目は、事例を使ったクリエイティブシンキング・ロジカルシンキングを意識したグループワーク、マナー講習を行った。事例を使った「問題解決プログラム」を行うことによって、実際にプロジェクトが問題に直面したときの解決法を学んだ。また、プロジェクトを通して外部の人と接する機会が多くなったため、名刺の渡し方や挨拶の仕方などの基本的なマナー講習を行った。研修合宿2日目は、実際に学生スタッフの各プロジェクトを事例としたグループワークを行った。まずは、プロジェクトについて各担当者が紹介し、問題提起をした。そこで、皆がプロジェクトの問題を共有し、共に悩み、解決方法を考えた。そしてそれらをまとめて発表しあった。最初は議論も滞りがちだったが、学年関係なく議論を繰り返したことで次第に学生スタッフ間の距離が縮まり、議論も活発になり、各プロジェクトの問題解決方法を導き出すことにつながった。研修合宿3日目は、新スタッフ募集説明会の企画立案を行った（10月開催「求む。ふまじめ人間」Do for others サークル説明会(詳細は27ページ参照))。これは、研修会で議論した内容を元に、各プロジェクトの魅力を発信していく実践だけではなく、2日間の研修の総まとめとしての良い機会となった。

学生スタッフには、ボランティア歴1年目の人もいれば、長年活動を続けてきた人もいる。年齢・ボランティアフィールドも違う。このような人々が3日間交わり、熱く語り合うことで、様々な“ボランティアスタイル”を知ることができた。特に初日の夜にコーディネーターが、最終日の最後に4年生の学生スタッフが語ったそれぞれの「ボランティアと自分」をテーマにした講演は、議論の活性化に一役買った。そして、最終日の振り返りで皆が口々に語った「がむしゃらである」こと、そして「謙虚である」ことの大切さ。これから、自分がどのような活動を行い、どういった道に進みたいのか。今回の研修合宿は参加者全員の成長と新たな自分の発見につながり、秋学期に向けた学生スタッフ1人1人のモチベーション向上につながった。そしてプロジェクトそれぞれの課題や解決策も明らかになり、秋学期に再スタートを切る足がかりとなった。

(心理学部心理学科2年 須賀 ゆきの)

## Do For Others サークル説明会 - 求む。ふまじめ人間。 -

### 【はじめに】

2008年10月、白金学生スタッフ主催「Do For Others サークル説明会-求む。ふまじめ人間。-」を開催した。説明会のコンセプトは「自分のためだけでなく、誰かのために」「自分ひとりの力だけでなく、仲間と一緒に」である。また、本学の建学理念である「Do For Others」をサブテーマとし、固定概念に捉われない柔軟な姿勢をもつ人材を募集したいという意味で「ふまじめ人間」をキーワードとした。

今回は白金学生スタッフが展開している各プロジェクトの新メンバー募集と学生スタッフのプレゼンスキルの向上を目的とした。また活動拠点である白金校舎だけでなく、横浜校舎でも説明会を行うことで校舎に関係なく人材を募り、活動の幅を広げることも目指した。

### 【方法】

説明会というと教室でのプレゼン形式というイメージがあるが、今回はブース形式も取り入れた。ブース形式で行うメリットは、気軽に参加しやすい、目に付きやすい、少人数のために質問がしやすいといったことが考えられる。これは教室のプレゼンだけでは入りづらい、抵抗があるといった敷居の高さの問題を改善しようという新しい試みだった。また、春学期に開催したベンチャーサークル説明会(詳細は本書 25 ページを参照)と同様にパワーポイントによるオープニングムービー(参照 URL: <http://voluntee.meijigakuin.ac.jp/student/shirokanestaff.html>)を制作した。

### 【成果・今後の課題】

説明会をきっかけに各プロジェクトの活動を知り、興味を持ってくれたり、実際にプロジェクトに参加してくれた学生もいた。しかし、今回は十分な広報活動を行うことができたにもかかわらずプレゼン・ブース形式ともにあまり集客率は良いとは言えなかった。また参加者のアンケートを集計した結果、学生スタッフの活動を知らなかったという声が最も多く寄せられたことから、白金学生スタッフの活動の知名度の向上が今後一番の課題であるといえよう。

この説明会の企画が立ち上がったのは、白金学生スタッフの研修会(詳細は本書 26 ページを参照)の最終日であった。その時点で私はどのプロジェクトにも本格的に関わっておらず、他のスタッフの前で発表する機会がなかったために、先輩のすすめもあってこの企画の担当者に立候補し、初めて会議を運営し、企画を立案した。企画の準備段階では、何をどこからはじめればいいのかわからない状態であったが、わからないなりに、先輩方に聞いたり手伝ってもらったりして企画を進めていくことができた。

この説明会の開催を通して、私は企画立案から司会進行、先輩の代理としてプレゼンをする等、様々な経験をすることができた。もちろん失敗もたくさんあったが、以前より自主的に動けるようになったように思う。そして1年生のうちからこのような経験ができたことで、今後どう活動していけばいいのか、自分なりの改善目標ができ、学生スタッフとして活動をしていくうえでの自信につながった。

(心理学部心理学科1年 本間 由香)

## 白金志田町倶楽部明治学院大学学生チーム

2008年4月から一緒に活動をするようになった白金志田町倶楽部（以下、志田町倶楽部）。出会ってから約8ヶ月、白金志田町倶楽部学生チーム（以下、学生チーム）の活動の報告をする。

### ○活動の経緯

明治学院大学は東京都港区白金台にキャンパスがあるが、多くの明学生が抱く白金という町のイメージは“セレブ・シロカネーゼ”が住んでいて、ご近所付き合いはないというものではないだろうか。しかも、白金にある明治学院大学に通っているにも関わらず、多くの明学生と白金地域の方々との交流はほとんどない状態だった。そんな中、李コーディネーターから白金地域の方々が集う懇親会のお誘いを受けた。その時、初めて志田町倶楽部の方々とじっくり話すことが出来、お互いに対するイメージの差を実感したのと同時にその差を埋める事ができた。そして明学生の立場からでしか出来ない地域のための活動を今後展開していくこと、それにあたって志田町倶楽部の皆さんと協働していくことになった。

### ○活動内容

私たちは主に、志田町倶楽部が白金地域で開催しているイベント（シロカネストリートフェスタ等）から日常的に行われる活動（防犯防火パトロール等）まで、学生としての立場で関わってきた（詳しくは本書「ボランティアファンド学生チャレンジ賞」を参照）。活動を通して感じたのは、活動場所が大学から徒歩圏内であること、授業時間の合間やボラセンで出会った学生に対して「これから活動しに行こう」などと誘いやすかったことなど、学生が参加しやすい条件が整っていたように思う。活動の幅も志田町倶楽部が地域の活動というだけでなく分野を問わない広い活動を展開しているために、学生の興味を引きやすく、何よりも志田町倶楽部の方がとても学生を理解し、尊重して下さったおかげで学生の側も出来る範囲で活動が出来たのではないかと思う。

### ○活動を通して

活動を通して学んだことの 하나가、“時間感覚”である。毎日活動に展開がある志田町倶楽部の活動では今までの学生の時間感覚で活動していたら間に合わなく、ついていくので必死だったように思う。また、忙しいはずの地域の方が、限られた時間の中で、志田町倶楽部のために、少しずつ自分の出来る事を行い、支えあっていることが志田町倶楽部の原動力だと感じた。

この活動は今までにない、学生×地域×大学の新しい活動のムーブメントになっていく可能性があると思う。閉じこもってその中で完結した活動を行うのではなく、学生×地域×大学の3者が本当の意味で協力し、それぞれに良い効果をもたらす活動にしていくために、うわべだけの議論ではなく、お互いの現状を相互に理解した上で、展開していくことが大切だと思う。また今後は、活動への参加学生の増加が考えられるが、その際に学生チームは、長期的な視点から志田町倶楽部や大学の協力して下さる方に対して失礼のないよう、参加学生との連絡など、形式的な仕組みを考えていく必要があると思う。

（心理学部心理学科3年 山田 純平）

## パールビーズの森プロジェクト 学生チーム MG パール

インドネシア・ボルネオ島では、アブラヤシのプランテーションの急激な増加により森林が失われ、オランウータンやボルネオゾウなどの野生動物たちは棲家を失い絶滅の危機に瀕している。しかし、アブラヤシから採れるパームオイルは私たちがよく口にするインスタント麺・ポテトチップス・アイスクリーム・冷凍食品などに使われている。7月、学内で行われたボルネオ保全トラストジャパン（以下 BCT）によるボランティア説明会で初めてこの事実を知った私たちは、BCT が進める『オランウータンに森をプレゼントする』というプロジェクトに賛同し、MG パールという学生チームを立ち上げ、ボランティアセンター、BCT との三者協働プロジェクトが始動した。具体的には、ボルネオで採れる淡水パールを使って、携帯ストラップやアクセサリーを自分たちでデザイン・製作し、それを販売した収益金でボルネオに野生動物たちのための森を購入することを目指した。私たちはまず、知識がなかったため、DVD を見たり、BCT の方から野生動物の現状について伺ったり、アクセサリー製作の技術習得を目的とした講習会を7月30日に企画した。ボルネオ産のパールは1つ1つ粒の大きさも穴の大きさも違い、世界に1つだけの商品ができるが、デザインを考えるのに苦労した。8月には多摩動物公園を訪問し、実際にオランウータンを見学した。私たちと同じ様に餌を食べたり、手袋をはめたり、雑誌を読む姿を見て、人間の都合で彼らを絶滅へ追いやっていると思うと、心が苦しかった。「何かできることをしたい」と改めて思った。そして実際にアクセサリーを販売するため、11月から毎週木曜日ボランティアセンターでアクセサリー講習会を始めた。1つの商品を作るのに予想以上の時間がかかり、どの程度の数ができるか心配だったが、スタッフの頑張りや、学内ポータルサイトでの広報や口コミで集まった多くの学生が参加してくれ、十分な数の商品を用意することができた。私たちの思いがこもった世界に1つしかないアクセサリーが作れたと思う。こうして12月14日（日）、本プロジェクトの大イベントとして『ジャングルクリスマスフェスタ in 白金』を白金校舎で開催した。ボルネオの現状とプロジェクトの周知、パールアクセサリーの販売を目的とした本イベントでは、賛同した多くの学生たちがボランティアとして集まり、運営に協力してくれた。ステージでは、アナウンス研究会の学生による司会で、学内サークル及び学生有志らが民族舞踊や音楽を披露し、来場してくれたお客様たちへのクリスマスプレゼントとして花を添えた。このように多くの学生が関わってくれたおかげで、イベントは大成功に終わった。一番苦労したのは広報活動だったが、近隣の小学校、児童館、地域の方々の協力のおかげで悪天候の中、多くの来場者があり、募金・アクセサリーによる売り上げ目標額も達成することができた。以上から、私たちは地域・大学・学生の可能性を感じることができた。そこで、来年度はその可能性をさらに具現化したい。具体的には、「白金」という恵まれた地域資源を活かし、近隣の小学生たちとの多摩動物園訪問や商品製作、シロカネストリートフェスタ(本書 28 ページ参照)への出店といった協働を計画している。本学のシンボルマークである MG。私たちは「MGらしい活動」を目指して、今後も地域とのつながりを大切にしながら、世界の環境問題に取り組んでいきたい。(心理学部心理学科2年須賀ゆきの・1年岩永春香)

## MG☆SUZU、始動。

白金キャンパスからほど近い新橋に、特別養護老人ホーム・老人保健福祉施設・知的障害者更生施設の3つの機能を兼ね備えた複合型の福祉施設「福祉プラザさくら川」がある。この1階に、「茶房さくら川」があり、施設利用者をはじめそのご家族、施設職員の方、地域の方々や近くにお勤めのサラリーマンなど、様々な人々が訪れる地域交流スペースとなっている。この場所で始まったのが昨年度から行われている「さくら川・明治学院大学地域連携プロジェクト」である。当初の活動は明治学院の学生が、茶房さくら川でお手伝いをする事によって施設と地域との架け橋になるという目的で始まった。しかし、昨年度はメンバーが減ってしまったり、様々な課題や問題を残しながら今年度を迎えることとなってしまった。そこで今年度春学期、再起をかけて動き出した。新たな気持ちで再出発の意味をこめ、このプロジェクトの学生メンバーにチーム名をつけることにした。それが「MG☆SUZU」である。とは言っても、この段階で人数は昨年度からのメンバー一人。そこでまずはメンバーを募集するため、大学ポータルサイトで呼びかけたり、白金学生スタッフ主催のベンチャーサークル合同説明会（本書25ページを参照）に参加した。その一方で、ボランティアファンド学生チャレンジ賞（本書54ページを参照）に応募し、助成を受けることになった。その際に企画したのが、「アートプロジェクト」である。施設の中には素敵な魅力を持った方がたくさんいらっしゃる。このプロジェクトは、その魅力をアートという手段で形にし、茶房や大学で展示することによって、地域社会に発信していきたい、また学生と利用者が会話をしながら作品制作を行う中で、利用者の方々に楽しんでもらいたいという企画だ。

このように、たった一人からの再出発であったが、助成金も獲得し、メンバー募集も地道に続けた結果、メンバーは一人から二人、三人と増え、ついに、さくら川と大学ボランティアセンター、そして学生の三者ミーティングを開催することができた。三者ミーティングでは、さくら川からたくさんアドバイスを頂き、施設内にある特別養護老人ホーム「さくらの園」でアートプロジェクトを行わせて頂くことになった。また、このアートプロジェクトの魅力を学生に伝えるべく、さくらの園施設長・浦谷馨さんを招いて大学内でトークイベントを行った。このトークイベントの参加者から新たなメンバーが一人増え、MG☆SUZUは四人になり、「チーム」と呼べるところまでに至った。

このアートプロジェクトの主役は利用者の方々であり、利用者を第一に考えていかなければならない。そこでまず、10月から12月は利用者の方に私たちを知っていただき、交流を深める期間とした。おやつの時間にボランティアとして伺い、お話をしたり、粘土を使った体操などを行った。そこでの交流を土台に1月から2月にかけて作品制作にとりかかり、3月には施設内や茶房、そして大学での作品展示を行いたい。具体的には、「アートの花が咲く木」を作り上げること。これは学生が用意した木に、利用者の作品を花に見立てて展示するというものだ。

この木が満開の花を咲かせられるよう、MG☆SUZU全員手を取り合って頑張っていきたい。

社会学部社会福祉学科2年 依田 ツカサ

## プロジェクト名称：学生団体 SUCCEED

学内外における機関との連携する機会が増えることで、活動の幅と質の向上が見込めるため、2008年度よりボランティアセンター学生スタッフプロジェクトとして加わった。

### 1. 団体理念 ～学生によるブランディングプロジェクトの推進～

本学の事業の1つであるブランディングプロジェクトを学生主導で推進していこうというもの。学生にしかできない企画を見つけ行動することで、本学の建学の精神である「Do For Others」精神を学生が体現し、社会に新たな価値を提供し、本学の社会的存在感を高めることを目指す。

### 2. 活動内容の概要

現在、2つの事業部に分かれており、メンバーはどちらか一方の事業部に所属している。

#### (a) 出版事業部

##### ①明治学院大学総合情報誌フリーペーパー「MGstyle」の企画と発行

フリーペーパーという媒体を通し、明学の魅力を明学生に伝えることを目指す。また、紙面内の企画を工夫することで、「明学生」と「地域」「OB・OG」との繋がりも作っていく。

#### (b) イベント事業部

##### ①ボランティア部門

- ・江ノ島ビーチクリーンアップの開催

2008年1月から月一回のペースで学内外問わず参加者を募り、江ノ島海岸の清掃を行っている。

- ・港区のボランティア活動に参加

学外にもネットワークを構築するため、港区青少年対策高松地区委員会主催のボランティア（小学生を対象としたいちご狩り、キャンプ）に参加している。

##### ②セミナー部門

- ・『就活支援セミナーSTART』の開催（2008年10月・11月に開催）

就職活動生のために、内定者の経験を活かしたセミナーを企画。

### 3. 今後の課題と展望

以上のような活動により、学内における団体の認知度は高まった。しかし、活動範囲の拡大、人員の増加に伴い、組織的な基盤構築の甘さが目立つようになった。具体的にはコミュニケーション不足によるメンバーの敏捷性の鈍化、一部のメンバーへの負担の偏りなどが挙げられる。今後は、ミーリングリストの有効活用、年間スケジュールの作成、役割分担の徹底をおこなうことで効率的な組織運営が行えるように尽力していく。また、併せてボランティアセンターとのコミュニケーションも密にしていく。

※その他の詳細については、<http://succeed0web.cjb.net/index.html> もご参照下さい。

(法学部法律学科4年 佐藤祐太)

## COS(circle of Shirokanaise) – happy cycle, happy circle –

### 1、活動のきっかけ

本学は東京都港区白金台に校舎があり、私たちは毎日白金という町に通いながらも、地域とのつながりはほとんどない状態だった。そこで、「人と人とのつながりの輪を大切にし、学内・地域にその輪を広げていきたい」という思いを込めて「Happy circle, Happy circle」をキーワードに2007年12月、COS (Circle of Shirokanaise) を立ち上げた。

### 2、活動内容

2007年末にソニーマーケティング学生ボランティアファンドに応募し、助成金をいただけたことをきっかけに、2008年から本格的に活動を開始した。活動内容は大きく分けて3つある。

#### ① 大学周辺の地域清掃

月に数回学内で参加を呼びかけ、メンバーの手作りの竹製トンゴと揃いのエプロン、草木染めの軍手と何度でも利用できるビニールのゴミバックを使用し、自然でエコな雰囲気でも地域清掃を行った。また、白金祭(学園祭)でもイベント企画として清掃活動を学内で行った。テーマは「ゆるく、たのしく、かっこよく」。ゴミ拾いという誰でも簡単に始められる活動を通して、ボランティアの楽しさを知ってもらい、持続可能な活動を目指した。学外の活動では、白金地域の三光小学校の子ども達と「シロカネクリーンアップ大作戦」と題して白金高輪周辺の掃除を2回行い、地域との新しい繋がりも感じられた。

#### ② ペットボトルキャップ回収

ペットボトルキャップのリサイクルの収益金を、世界の子どもたちのワクチンへ変える活動に参加した。白金・横浜両校舎のボランティアセンター前に回収箱を設置し、「リサイクル」と「国際協力」の両面で、誰でも簡単に出来るボランティアを学内に向けて提案した。回収箱設置から日に日にキャップの数が増え、2009年1月現在までに約二万個も集まり、学内において意識の広がりを感じている。

#### ③ その他の活動

私たちは白金の地域の運動会やお祭りに参加したり、白金児童館でのボランティア活動に参加したり、地域との繋がりという面でも輪を広げた。そのほかには、COSの日々の活動の記録や楽しかった出来事などを、その都度ブログにアップした。(http://coscoscos.exblog.jp/)。

### 3、活動を通して得た課題

清掃活動は少人数で行うことが多かったのも、もっと参加者を募る方法や、活動日時の調整などに力を入れていくことが必要と感じた。また学内・学外のより多くの方たちに私たちの活動を知ってもらうために、もっと広報方法を工夫し、イベントなどを企画していく必要があると感じた。今後も「ゆるく、楽しく、かっこよく」活動を展開していきたいと考えている。 (文学部英文学科4年 高橋 佳)

## MG natural

私自身、様々なボランティア活動への参加を通じて、多くのことを学び、それらは自分の成長や新しい自分の発見につながった。そして、仲間や地域の人にも出会う良い機会となった。明学の中に面白い学生がこんなにもたくさんいると知ったのも、ボランティア活動を積極的に始めてからだ。そんな人達との関わりが今でも自分にとって良い刺激となっている。ボランティア活動を通しての自分の体験をぜひとも多くの人に伝え、ボランティアを明学に広めたいと思うようになり、それを形にしたのがボランティア情報紙『MG natural』である。「ボランティアを“自然”なことにするために。“ボランティア活動にかける思い”をナチュラルに伝えたい。学生に愛され、“自然”と手にとってもらえるフリーペーパーを作りたい。」という思いを込めて、『MG natural』という誌名にした。

創刊号となる今回、9月に掲載する内容を検討し、10月から白金学生スタッフの展開している各プロジェクト担当学生に原稿を依頼し、ボランティア活動を積極的に行っている明学生にインタビューを行った。次に、すべてのページのレイアウトや記事の編集作業に没頭した。どうすれば多くの人に読んでもらえる面白い記事になるのか。それは、簡単なようで難しいことだった。見た目はいくらでも変えることができるが、読み物である以上、いくら見た目を良くしたところで内容が伴っていなければ面白くない。ただ単にプロジェクトの概要を説明しただけでは、何も伝わらない。活動に関わった学生たちがどのようなことを学んだり、感じたか、それを1番に伝えることを考え、作業を進めていった。

実際は、創刊号ということもあって、すべてが手探り状態で、なかなか思うように作業が進まなかった。毎日遅くまで学校に残り、編集作業に明け暮れた。しかし、周りの人のサポートと励ましがあったからこそ、形にすることができた。11月に完成品が届いたときは、今までの苦労があった分、充実感でいっぱいだった。多くの人から、「すごいね。」「良かったよ。」と声をかけてもらうたびに、頑張ったよかったと思った。特に嬉しかったのは、授業教室内で知らない明学生がMG naturalを読んでいるのを見かけた時だった。多くの人の手にとられていることを実感した瞬間だった。

今後も自分たちが何を伝えたいのか、それを常に念頭に置きながら作っていかねばならないと思う。そして、次号、第3号と刊行数を重ねるごとに、ボランティアのさらなる輪ができていくことを願っている。今回は、予算の関係で、200部しか作ることができなかつたため、他大学との交流などでボランティアセンター学生スタッフについて話す際に手元に残部がなくて、ボランティアセンターHPにアップしたPDFを閲覧してもらうしかなかった。次号はぜひ部数を増やしたいと思っている。また、今回は人員不足のため、作業が個人に集中しがちになってしまった。今後は仲間を増やし、また後輩に技術を教えながら作っていきたいと考えている。

※『MG natural』はボランティアセンターホームページからダウンロードできますので、ご覧ください。

(心理学部心理学科2年 須賀 ゆきの)



## 白金校舎ボランティアセンター報告

### ① コーディネーター報告

2008年度も終わりに近づきつつある2009年1月20日、アメリカで初の黒人大統領が誕生した。第44代大統領となった、バラク・オバマ氏の就任演説では、心震えるフレーズにいくつも出会った。その中の、「On this day, we gather because we have chosen hope over fear, unity of purpose over conflict and discord. (この日に我々が集ったのは、恐れではなく、希望を選んだためで、争いの代わりに団結を選んだからだ)」というフレーズは、まさに今年度、学生たちと共に共有してきた価値観そのものであった。

私が白金ボランティアセンターの現場運営担当者であるコーディネーターとして、今年度の白金ボランティアセンターの活動において目指した目標は二つある。一つは心理学部と国際学部を「出会わせる」ことである。本学は白金校舎と横浜校舎の2校地を有するが、心理学部のみ4年間白金校舎で学び、国際学部のみ4年間横浜校舎で学ぶ。その他の学部は主に1、2年次を横浜校舎で、3、4年次を白金校舎で学ぶ。着任以来2年間、学生たちを観察した結果、心理学部は白金にアイデンティティを、国際学部は横浜にアイデンティティを持つ学生が多く（どちらかといえば国際学部のほうがその傾向を強く感じる）、その他の学部生には「校地」という観点からの強いアイデンティティへのこだわりはそれほど見受けられなかったように感じた。校地へのこだわりを「場所を語る」ことだと考えると、「場所を語る」ことによって自己のアイデンティティを語っているようにも理解できるのではないだろうかと考えた。このように自分の言葉を紡ぐことができる学生には、「力」があり「おもしろい」学生が多いのではないだろうか。このような仮説のもと、今年度はぜひ、そのような学生が在籍する確率が高いと考えられる、心理学部と国際学部の「出会いの場」を創出してみたいと考えた。それが、白金ボランティアセンターが本当に意欲のある学生たちにとって、利用価値のある魅力的な場所となり、全学的な活性化のきっかけになることを期待した。そしてこのようなプロセスの最後、年度末の頃にはたくさんの「おもしろい」学生たちとその周辺の人々の「出会い」が出来ているのではないかと想定して、その人々をネットワーキングする機会を創りたいと考え、それを二つ目の目標にした。

このようなビジョンを夢見て始まった今年度は、2007年度も終わろうとしている3月末の白金志田町倶楽部（以下、志田町倶楽部）との出会いが大きな転機となった。この団体については白金志田町倶楽部ホームページ（<http://www.ifaps.org/kai.html>）と本書「学生スタッフ」、「ボランティアファンド学生チャレンジ賞」のページを参照していただきたいのだが、白金という街が抱える様々な課題をなんとかしようとして立ち上がった地域の方々の団体である。私はこの団体の、「新旧住民、もしくは住民であるかないかを問わず、白金の街が好きで、目指すもの、価値観が同じなら皆仲間である」「時間よりスピード」という明確なポリシーに深く共感した。何より、このポリシーを実証していく格好良さと行動力の素晴らしさに感激した。そうして今年度がはじまったばかりの4月6日に学生有志3名を伴い、志田町倶楽部

の懇親会に参加したことをきっかけに、は5月25日に開催された「シロカネストリートフェスタ」での協働が始まった。これは、白金ボランティアセンターに非常に大きな影響を与えた。学生の事例は本書「学生スタッフ」のページ、「ボラチャレ受賞団体」のページ、「アメリカ NPO ボランティア体験学習プログラム」のページを参照していただきたいが、このフェスタでの協働を通じて、様々な可能性を知ることができた。まずは事務局が白金校舎から徒歩10分という好立地であることから、学生たちが大学にいる時間の空き時間を利用して活動に参加することが可能だった。それが持続可能な活動の地盤となり、事前の準備から当日までの活動に関わることができた。おかげで白金の街と人の魅力を十分に知ることができ、フェスタ当日だけの単発参加では創れない、地域の方々と一体感と信頼関係を構築することができた。また、学生4名が運営委員となって学生チームが発足したのだが、この4人のメンバーの内訳は心理学部2年生と3年生、国際学部2年生、法学部4年生であった。こうして早々に「心理学部×国際学部」という競演を実現でき、学生レベルの全学的な協働と、国際学部の学生にも白金での活動ができる、という新しい発想の選択肢を提示することができた。また、学生チームの発足に伴い、志田町倶楽部とボランティアセンター間において、7月28日、「白金志田町倶楽部明治学院大学学生チームの地域社会貢献活動支援における白金志田町倶楽部・明治学院大学ボランティアセンターの協力と連携に関する覚書」を取り交わし、締結式には、学生チーム運営委員、志田町倶楽部の皆さん、本学ボランティアセンター及び地域連携推進室のスタッフらが同席し、それぞれの立場を語り、情報を共有しあえたことで、三者（学生・地域・大学）協働の可能性を生み出すきっかけとなり、白金ボランティアセンターにおける三者協働プロジェクトの発展につながった。

このように、フィールドは校地ではなく場所であるという、当たり前だが新しい発想を全学の学生に向けて提示することができ、本学の学生が白金という地域で活動できる様々な可能性、そして何よりも白金という場所に校舎を有する明治学院大学の学生だけが享受できるメリットを実感してもらえたことで、活動の活性化と同時に、地域の社会貢献活動を通して明学生としての誇りが育つきっかけにもなった。また、このようなたくさんの経験と教訓を約1ヶ月半という短い期間で得られたことが、たった4年間しか明治学院大学の学生でいることができない学生たちと、彼らを支援する白金ボランティアセンターにとって、大きな自信と財産、そして協働する上での「方法」と「時間の感覚」に対する共通した価値観の共有につながった。

その直前である、7月13日に開催した「外部団体によるボランティア説明会」に参加した、NPO法人ボルネオ保全トラストジャパンとの出会いから、三者協働プロジェクト「パールビーズの森プロジェクト」が発足する（詳細は29ページを参照）。このプロジェクトは、アブラヤシのプランテーション開発のために行われているボルネオの森林伐採という問題に対して、伐採をやめればパームオイルが生活必需品である私たちの生活と、収入源になっている現地の人々の生活が困窮するという「開発」に対する問題と、「開発」によって棲家を追われた動物たちを守るという「保全」という、同時に「解決」する

ことが難しい問題に向き合いながら、今できることを実行していこう、という主旨で展開している。具体的には、ボルネオで採れる淡水パールを活用してパールアクセサリーを開発、製造し、それを販売して得た収益金でボルネオの森を買い、自分たちが享受したパームオイル分のプランテーションの土地を野生動物たちにプレゼントという形で返していこうというものである。学生たちが、「結果を出さなければ本当の支援にはつながらないボランティア活動」という厳しさにも向き合い、活動を通して経済サイクルの中における社会貢献の形を考える発想力を持ち合わせる機会として期待している（プロジェクトの詳細は29ページ参照）。

そのほか、今年度の白金ボランティアセンターは、本当にたくさんの地域の方々との交わりの中で運営した年となった。前述では、今年度から新しい関係が生まれた団体を詳述したが、前年度から続くお付き合いをさせていただいた団体との関係があったからこそ、今年度のような発展にステップアップすることができたと考えている。

前年度から「地域連携プロジェクト」として協働してきた福祉プラザさくら川とは、今年度の初めに参加学生たちが1名を除いてドロップアウトする事態になった。この件を通じて、さくら川には多大なる迷惑をかけることになったのだが、それでも本学に対する期待と信頼を持ち続けてくださったことにより、活動は継続し、最近になってようやく小さな芽吹きが始まった（詳細は30ページ参照）。新年度から困難な状況になったが、前年度までの反省と教訓として、学生が主体的に関わる形、それに対するボランティアセンター側の支援体制と教育、指導、さくら川の体制や考え、学生ボランティアやボランティアセンターに期待するものといった、三者それぞれの価値観と領域、責任について、率直に何度も何度も議論を重ねた。福祉の現場を通じて、改めて人とのコミュニケーションや本当の連携と協働の形とは何なのか、試行錯誤しながら創り上げる困難と充実感を学ばせていただいた。

そのほか、2年近いお付き合いになる林試の森クリニックには、継続的に心理学科の学生たちがお世話になっている。病院という特殊な環境で臨床の現場を目の当たりにしながら学生がボランティアという立場で経験を積む機会を頂戴することはなかなか難しいが、院長先生を始め、スタッフの皆様の暖かいご指導のもと、お世話になっている学生たちは充実感一杯に活動させていただいている。

また、白金校舎近隣にあるスリランカ大使館には、毎年渋谷の代々木公園で主催する「スリランカフェスティバル」への当日ボランティア募集の協力を行っており、このボランティア参加を通して、学生たちが気軽に地域社会や多文化共生社会に参加できる機会を頂戴している。今年で3回目の協力となるが、約50人の本学の学生たちが参加させていただき、年々その参加者数は増えている。フェスティバル後の大使館主催のボランティア感謝パーティも楽しい交流の機会として学生たちはとても楽しみにしている。

その他、昨年度から年間を通してお付き合いをさせていただいている港区青少年対策高松地区委員会にも、非常にお世話になった。4月にはこの団体が主催し、今年で24回目の開催という四半世紀も続く

「ふれあい運動会」に本学の学生が初めて参加させていただいた。この運動会は白金校舎に隣接する白金小学校で行われるもので、約 300 人あまりの近隣地域の方々が参加する。学生スタッフを中心に、4 名がふれあい運動会実行委員会の運営会議から参加させていただき、当日は約 15 名の本学の学生たちが競技のデモや設営、片付けを中心に参加させていただいた。運営委員会は白金小学校で行われたため、学生たちは無理なく参加することができた。地域の方々は「近くて遠いと思っていた明治学院大学の学生さんたちと交われて本当に嬉しい。いてくれるだけで嬉しい。」と手放して喜んでくださった。運動会後は小学校の図書館で地域の方々が腕を振るった手料理を皆で囲み、楽しい交流会となった。それに続き、8 月は同団体が主催する白金地域の子どもたち 80 名ほどを引率するサマーキャンプボランティアにも学生団体 SUCCEED (57 ページ参照) の学生を中心に 10 名ほど参加させていただいた。また、このような本学からの参加だけではなく、団体の方々が白金校舎でボランティアセンターが主催する各種体験学習プログラムの報告会に足を運んでくださったり、ボランティアセンター活動推進委員会の委員としてもご参加いただいたり、相互関係が構築されている。今後は白金地域の子どもたちと出かけるいちご狩りが 2 月に、白金地域の子どもから高齢者まで出演する、「ふれあいコンサート」が 3 月にあり、それぞれ学生たちが参加させていただく予定である。

このように学生たちが積極的に地域に多く出て行くことで、地域の中でも学生とボランティアセンターに対する認知と理解が広まった。12 月に開催したジャングルクリスマスフェスタ in 白金 (29 ページ参照) では、学生が直前に突然相談に伺ったにも関わらず、白金小学校で快く広報協力をしてくださった。おかげで、当日はたくさんの子どもたちと地域の方々が訪れてくださり、イベントの成功につながった。日常的にも、白金校舎近隣で「顔見知り」の地域の方々が増え、白金の街を歩いていて「挨拶」が飛び交うようになった。これは、まず学生たちとボランティアセンターが地域にでかけていったことで、地域の方々が受け入れてくださり、その上で地域の方々が私たちに門戸を開いてくださったのだと考える。そうした過程で、地域への「愛着」と「誇り」という形が学生、そして私の中にも芽生えていき、地域の方々からも明治学院大学へ愛情をいただけるようになっていったのだろう。

学内においても新たな輪が広がったことも、今年度の大きな特徴である。学生への広がりとしては、公認団体のボランティア活動への直接参加例として、カポエイラのジャングルクリスマスフェスタ in 白金 (詳細は 29 ページ参照) への出演や、JAZZ 研究会の白金志田町倶楽部白金ジャズ化プロジェクトへの参加、本学の卒業生がスタッフで活躍していらっしゃる NPO 法人 Club Tom と、日本シッティングバレーボール協会、日本ろうあバレーボール協会が企画した「デフ × シッティング × Club Tom バレーボールフェスティバル」への手話サークルぼっけによる手話通訳ボランティア参加などがあった。間接的な参加例としては、学生スタッフ主催ベンチャーサークル合同説明会 (詳細は 25 ページ参照) に参加した未公認団体 (COS、こどぶき学童ボランティアじゅんたま、学生団体 SUCCEED、MG☆SUZU、NPO 法人 birth、世田谷 BBS 会) があった。

また、学生のみならず、教職員にまで輪が広がったことも大きな収穫であった。教員が、コーディネーター（以下、筆者）を積極的に授業に呼んでくれることで、白金ボランティアセンターの活性化のために協力してくれた。社会福祉学科茨木尚子先生の「社会福祉運営論 A（白金校舎開講）」では、さくら川のスタッフとともに地域連携プロジェクト、MG☆SUZU（30 ページ参照）について紹介させてもらい、MG☆SUZU の新メンバー獲得につながった。また、教養教育センター猪瀬浩平先生担当の「ボランティア学2（白金校舎開講）」では、白金の街をテーマにした2回連続という形の講義を設定してもらい、第1回目の授業では志田町倶楽部が白金の街を語り、第2回目の授業では筆者と白金学生スタッフチームとの「共演」で「白金と明学を結ぶ、種をまく」というテーマで話し、授業という形において「地域×学生×教員×職員」という協働を生み出すことができた。また、筆者と国際学部所属の白金学生スタッフとの「共演」で、「ボランティア学3（横浜校舎開講）」でも「ボランティアがうまれるとき」というテーマで横浜校舎に在籍する1年生に向けて話すことができた。そのおかげで、横浜校舎に在籍している学生もわざわざ白金ボランティアセンターを訪れたり、白金での地域活動に参加するようになった。また、猪瀬先生には学生スタッフミーティングにも参加していただき、様々な助言を頂戴した。このように、専門家の方々に関わってもらえたことで、活動に幅と深みが出た。そして、講座や授業を持たない、学生との窓口が無い環境であるにも関わらず、学生たちとの協働を目指すという、今のボランティアセンターが抱える構造的な問題をフォローしてもらえた。協働と依存の違いをしっかりと認識し、今後も教員との協働を進めながら、ボランティアセンター自体が抱える課題について解決に向けて同時に動くことが重要である。

職員に関しては、前述した地域推進連携室以外に、広報課とのつながりが広がった。「結果」としてのニュースではなく、プロセスを追って記事にさせていただきたい、という相談に快く応じてもらい、現在、MG☆SUZU を追跡取材してもらっている。今後、広報課が発行する大学広報紙「白金通信」に取り上げられる予定である。職員との交流を通して最も印象深かった点は、学生のために何かしたいという気持ちがあるものの、事務部署という範疇でどのように具体的に支援できるのか、というジレンマを抱えているということだった。以上から、教育機能、事務機能もあり、学生との距離が非常に近いという、他部署にはない特殊性を持ったボランティアセンターだからこそ、学生だけではなく、教職員も含めた学内連携の構築において他部署では担うことのできない役割を果たせるのではないかと考える。

最後に、今年度は本学の卒業生の方々との輪も広がった。横浜校舎の学食にパンを下ろしている社会福祉法人共働舎の施設長は本学社会福祉学科の卒業生であるが、障害者の自立支援として20年近くも前から授産施設の運営に尽力されてこられた、パイオニアである。この方を学生団体 SUCCEED が MG style（詳細は 31 ページ参照）で取り上げ、学生たちが直接インタビューさせていただいたことで、学生たちは本学の魅力と卒業生という人的財産について再認識するきっかけになった。そうした実感が、その後、学生団体 SUCCEED 主催のイベントのコンセプトとして実際に現れている（詳細は 31 ページ

参照)。その他、11月13日には「外部団体によるボランティア説明会」としてフェアトレードショップの草分け的存在である第三世界ショップにお越しいただいたが、本学を3年前に卒業されたスタッフの方が来校して下さったおかげで、インターン時代の話、就職と社会貢献活動、自身の経歴など等身大で学生に向けて語ってくださり、学生たちに非常に好評だった。そしてその後、横浜校舎でも話をしてくださることになり、多くの在校生たちが話を聞くことができ、自分の人生観、職業観について身近で具体的な例から考える機会となった。更に、後輩たちの活動の活性化に少しでも協力できれば、ということで、ジャングルクリスマスフェスタ in 白金（詳細は29ページ参照）に出店して下さり、後輩のイベント成功のためにご協力くださった。

以上のように、白金ボランティアセンターは前年度までに比べ、劇的な変化を遂げることができた。何よりも目に見えて分かりやすい変化は、来室学生の増加である。学生スタッフらは空き時間を縫ってはやって来て、その場で打ち合わせ、コーディネートや学生対応、作業などを行う。学生スタッフ以外にも体験学習プログラムの学生たちなども頻繁に訪れる。そしてボランティアセンターで発信する利用価値が増えたことでその他の学生たちも自然に集まるようになった。そして必ず、初対面の学生同士は自己紹介をするのが約束事となっている。したがって、ボランティアセンターに来なかったら絶対に友達にはならなかっただろう、という「キャラクター違いの友人の輪」が広がっているのも特徴の一つである。また、今年度から頻繁に訪れるようになった学生が、たまたま学生が誰もいないセンターを訪れた際、「学生誰もいないのですか？珍しいですね！」という言葉を目にしたときは、確実に変わったことを実感した。このような量的な変化だけではなく、質的な変化の実感もあった。授業や学生スタッフが発行しているフリーペーパー、口コミなどで白金ボランティアセンターの活動を知ってから来室してくれた学生たちは皆一様に驚く。「こんな暗くて狭かったんですか！でもやってることは大きいんですね！カッコいいです！」確かに、白金ボランティアセンターは窓もなく、本館の地下のような雰囲気のある1階にある。広さも前面ガラス張りですらなく、広々とした横浜ボランティアセンターに比べても、半分以下の広さだ。学生スペースに学生が5人もいれば、圧迫感で一杯だ。しかし、訪問した学生たちが言ってくれたこの言葉は、私も含め学生スタッフたちにとって、何よりも嬉しく、誇らしかった。白金学生スタッフチーフ報告にもあるが、私たちは「限られたヒト・モノ・カネ・ジカンの中でどこまでベストを出せるか」という考えを共有しながら、協働してきた。人員、資源、お金、時間はあるにこしたことはないが、結果を出すための直接的な要因とは断言できないだろう、という現実を自覚するところから自ずと自分自身と環境とのライフワークバランスが見えてくるし、結果的にベストが出せるのではないか。その挑戦と実証の実践が今年度の活動だった。

紙面の関係から紹介しきれなかった方々も多いが、このように今年度は地域、学内（学生、教職員）、OB・OGの皆様による、大きな輪が広がったことは、白金ボランティアセンターにおける最大の成果であり、次年度への礎となった。そして、このような成長を遂げるに至った一番の立役者として活躍した

のは、白金学生スタッフであった。

彼らに対して特筆すべきことは、実践活動と、学生と学生、学生と地域をつなぐ架け橋としてのコーディネーター的機能と役割を、形にとらわれることなくしなやかに創りだしたことだろう。既存の学生スタッフの形において一番の課題であったのが、実体を創造する前に形を作ったことによって、「実体」を創造したかのような錯覚を持つパラダイムに陥り、その規範の中から動き出すことができなかったことである。2年間の試行錯誤と努力によって、今年度はようやくその壁を打破することができ、本学の学生の持つ力と魅力を伸び伸びと発揮することができたことは、大きな成果であった。彼らの今年度の実績はボランティアセンターホームページにて発信している。そしてそれは、それまで情報の更新が滞っていたボランティアセンターホームページにも動きが出るきっかけとなった。今回、報告書を通して彼らと協働できたことを非常に嬉しく思うとともに、仲間として、彼らを心から誇りに思う。

現時点で、白金学生スタッフは主にプロジェクト制のスタイルで活動を展開しているが、それは今現在のボランティアセンターの環境と状況、学生の人数と状況の中におけるベストであると考えている。補足するなら、プロジェクト化を目指して活動してきたのではなく、学生の想いの実現と夢を語る場所づくり、そして社会課題に取り組むという意味でのボランティア活動の構築を目指した結果が三者協働スタイルであり、プロジェクトスタイルだったということである。その過程で学んだことは非常に多い。まずは白金校舎近隣には、豊富な地域資源が存在するということである。地域資源とは、想いを行動に移せる人々がたくさんいる地域ではないかと考えている。そしてもう一つは豊富な学生資源との出会いである。本学には愛校心をもった、向上心旺盛な学生が多い。そして、プロジェクトのプロセスそのものが、このような有能な学生の総合的な社会力を育てる実践の場となっていることである。当然ながら、今後、地域社会の抱える課題も、学生の様子も、プロジェクトの形も変化していくだろう。しかし、変化とは成長であり発展であると考えている。これからも変化を柔軟に楽しみながら、白金ボランティアセンターの価値を創造していきたい。

最後に、現在私は業務として、2つの体験学習プログラム（9ページ・13ページ参照）と、白金ボランティアセンターの現場運営を担当しているが、現場の立場から、育成という観点の教育と協働という両輪を武器として展開していくことが、ボランティアセンターの発展を大きく左右すると考える。今年度の経験から、大学ボランティアセンターは希望の組織化を図る役割を担った場所であると考えている。その機能をいかんなく発揮するためには、構造的な問題解決のための組織的な取り組みが必須である。そして実際に、今年度、本学執行部が委員会をたちあげ、その検討を始めた。今後の展開がおおいに楽しみである。

世界的な経済危機に見舞われ、実体経済という言葉が頻りに耳にする昨今だが、ボランティアの領域においても、同様のロジックを当てはめることができるだろう。そういう意味では、実体豊かな地域資源に恵まれた白金ボランティアセンターは本当に幸運だと思う。そして実体を創造し、自分の言葉で自

己のアイデンティティを語れる学生が着実に集まり、育っている。そして今年度も終わろうとしている今、今年度の初めに掲げた第二の目標の実現が現実味を帯びてきている。2月19日に秋学期（後期）白金学生スタッフ研修会を開催するが、そこで今年度培った学生、地域、教職員を「つなぐ」イベントを3月に企画する予定である。そして、このイベントが今年度、共に走ってくれた卒業していく4年生たちへのはなむけにしたいと考えている。補足するなら、このイベントは、彼らへの人脈という形のギフトであると考えている。それは在校生たち、そして来年度入学する新入生たちにとっても大きな財産となるだろう。

私はこのように、夢と希望を学生とともに語り、議論し、形にできる立場で本学にいることを、この上ない幸せと喜びとして感謝している。そして今年度が終わる3月まで、そして新年度からも学生、教職員、地域の方々と共に進化を続けていきたいと考えている。本来、大学という場所は、夢と希望を語り、議論をする場所だと考える。希望を組織化する役割を果たすべく、来年度はボランティアセンターを「夢を語り、学生の可能性を引き出せる場所」としてより明確な形にしていきたい。

ミシェルアメリカ新大統領夫人が就任式で身に着けたスーツは、「希望」と「再生」を表す、黄色だった。黄色は、本学のスクールカラーである。波乱に満ちた門出であるが、「Yes, we can」と力強く訴えるオバマ大統領とミシェル夫人のように、私たちも「希望」と「再生」の加護のもと、白金の地で「Yes, we can」と力強く続けたい。

(李)

## 小田急プロジェクト

明治学院大学横浜キャンパスは横浜市の南西部に位置しており、JR 戸塚駅から徒歩 20 分のところにある郊外型のキャンパスである。横浜キャンパスでは「地域に開かれた大学」というコンセプトのもと、「戸塚まつり」や「公開講座」をはじめとした各種活動を実施し、地域との連携をはかっている。しかし、大学周辺を往来する学生のマナーの問題など、大学と地域の間には様々な課題もある。そういった背景があるなかで、地域との協働作業を行い、大学や明学生と地域住民との関係をつくることを目的として始まったのが小田急分譲地の住民と連携したプロジェクトである。

小田急分譲地は、横浜キャンパスの北門を出た一帯に広がる地域にある。3年前、都市計画道路が開通する以前には分譲地内を通るバスに明学生が乗車しており、この地域と本学との関わりは深い。例えば、地域でおこなわれる防災訓練に学生スタッフがお手伝いに行くなど、ボランティアセンターや学生が小田急分譲地の住民たちとの活動に関わってきたが、恒常的な交流まではいたっていなかった。

一昨年に山下コーディネーター（当時）が住民の方と話をしているときに「学生が地域活動に参加することで、地域、大学、学生の関係性を変化させたい」ということが話題になった。センターとしては学生たちに地域活動の実践を学んでほしいという思いがあり、また住民の方も学生たちが加わることで地域活動がより活発になるのではないかと期待があった。住民の方と活動内容等の打ち合わせの結果、まずは住民の方が行っている「しあわせの会」（食事会とレクリエーション）、「サロンすみれ」（茶話会）、地域の公園清掃の3つの活動に学生たちが参加することとなった。早速にメンバー募集を行った結果、5人の学生が名乗りをあげた。

昨年1月より学生たちは「しあわせの会」と「サロンすみれ」に参加することとなった。運営スタッフの方たちが一人ひとりの健康状態や食べ物の好みに気を配るなど、配慮が行き届いた活動に学生たちは驚きながらも住民同士の支えあいを学んでいる。活動に参加したばかりの学生のなかには、戸惑っている様子も見受けられたが、間もなく打ち解け、料理の手伝いや後片付け、レクリエーション活動に積極的に参加していた。公園清掃の活動では、草刈りなどの掃除を行った。公園の整備の結果、子どもたちが快適に遊べる環境が整えられたり、防犯対策になるなど、地域の方が取り組まれている活動には多くの意義があることに気づいた。また清掃を共にしながら現役時代の仕事の様子を聞いて、学生たちは多くのことを吸収していたようだ。

4月には、学生の自主性を生かした活動を展開していくため、「あったかサークルひまわり」というサークルを立ち上げた。6月に横浜キャンパスで開催された「戸塚まつり」では、横浜市水道局とひまわりの学生たちがコラボレーシ



ョンを行い、横浜市の水源地である道志の間伐材を利用したペン立てづくりを計画し、住民の方を招待した。当日はたくさんのお子どもたちが来校し、まつりを楽しんでいた。このように地域の方と明学生の交流がすすんだ結果、考えられた企画が「小田急プロジェクト・あったかサークルひまわりプロデュース・あったか交流会」<sup>6</sup>である。住民の方にとって大学が「近くて遠い存在」であることを解消し、大学を身近に感じてもらい、気軽に足を運んでほしいという考えから、横浜校舎内のMGカフェに招待しようというものである。この企画をボランティアセンターが主催している「ボランティアファンド学生チャレンジ賞」に応募したところ、助成企画として支援を得ることができた。

夏には、地域の盆踊りの練習に参加したり、小田急自治会のお祭りに参加して神輿を担いだり、矢倉の上で盆踊りを踊らせてもらうなど、一緒になって夏の行事を楽しんだ。

その後、小田急プロジェクトは筆者が担当となり、学生への支援や地域との連絡・調整を行うこととなった。学生たちは、絵本の朗読や明学への関心を高めてもらうようなオリジナルカードゲーム（「明学ここどこ！？絵合わせゲーム」）、を行うなど、自治会の方と学生がともに楽しむ交流を行った。また、自治会の秋祭りや区民まつりのお手伝いなどに積極的に参加し、学生たちの活動は広がっていった。11月には、サロンすみれで知り合った住民の方がMGカフェを訪ね、お茶を飲みながら学生と交流をはかると、住民の方と学生、大学の距離は少しずつ縮まっている。

小田急プロジェクトは、社会を支えてきた人生のベテランのそばで活動し、地域活動そのものや、地域をより住みやすくするための方策を体験を通して1つひとつ学んでいく活動である。活動への参加にあたっては受身でなく、積極性も必要である。活動を行っているところは住民の「生活の場」であることに留意し、地道な活動を確実に継続していくということが大切である。

活動を通して、住民の方と学生、大学の距離は少しずつ縮まり、学生と地域の方との関わりも変化している。デイサービスでの食事づくりの手伝いや話し相手という「参加」から、季節にちなんだ企画や交流がすすむ活動を考え、実現していくという「参画」へ、又、自治会の方が大学を訪問したり、大学を地域の資源として活用していただくといった双方向な関係に変化している。このように地域住民と学生、大学が交流する「場」が広がっている。今後はこの活動を通じて、多くの学生、地域住民の方が交流をはかり、学生が地域の方から多くのことを学びながら、地域、学生、大学の交流の輪が広がっていくよう、活動を積み重ねていきたい。

(糸井)



<sup>6</sup>「小田急プロジェクト・あったかサークルひまわりプロデュース・あったか交流会」の目的と活動内容等については、本書「ボランティアファンド学生チャレンジ賞」のページを参照。

## 横浜 YMCA ワークサポートセンター「パン工房アンジュ」との交流

横浜キャンパスの正門を出てすぐのところに、横浜 YMCA が運営するワークサポートセンター「パン工房アンジュ」がある。ここは、地域活動支援センター（作業所型）の施設で、発達障がいのある10代～20代の人たちがパンの製造やパン販売をし、将来社会で働くための準備をしている。アンジュは毎週木曜日の昼に大学構内に出店しているので、学生たちにとっては身近なパン屋さんである。

昨年8月にアンジュの職員がボランティア募集のためセンターに来室した際、学生とアンジュの通所者との交流を通して、学生と発達障がい者、施設、大学の協働の場をつくっていこうという話が生まれた。まずは明学生がパンづくりやパン販売の手伝いを行いながら相互理解を進め、活動の方向性を探ることとなった。10月と11月に「アンジュ・ボランティア Day」と称してボランティアを募集したところ、センターにボランティア活動を探しにきた学生や学生スタッフが興味をもち参加した。その後、学生スタッフたちが、学内でのパン販売の手伝いをするなど、双方の距離は縮んでいった。12月には学生スタッフが企画し一般の明学生も参加して、アンジュで働く通所者と一緒にクリスマス会を行った。学生と通所者が一緒にお菓子を買っていくって会の準備をしたり、テレビ番組の話で盛り上がるなど、同世代ならではの交流があった。学生たちは「はじめはどう接していいのかわからずに戸惑ったけれど、自然体で接すればいいことが分かった」「アンジュで働く通所者の方は、感情を素直に出してくれて、とても楽しかった」など、はじまったばかりの交流に手ごたえを感じていた。一方、クリスマス会の終わった日の夜、通所者の一人が活動の楽しさのあまり興奮して寝れなくなり、翌日仕事を休んでしまったという事態があり、そういったお互いの特性を理解した上で、活動をしていくことが、大切であると身をもって学んだ。アンジュでの活動は、大学の中でできるボランティア、また空き時間を利用して参加できる活動として、学生たちの間で浸透してきている。3月には柏尾川の清掃活動<sup>7</sup>を一緒に行うなど、学生と通所者がともに地域の活動に参加する話も進んでいる。一方、アンジュの母体である横浜 YMCA が国際協力事業を行っているので、アンジュを拠点として国際協力活動<sup>8</sup>を展開していく可能性について、学生を交えてディスカッションを行っている。

ボランティアセンターとアンジュとが核になり、学生と発達障がい者、施設、大学という4者の協力・交流をすすめていこうとする、この活動は試行錯誤の途上であるが、活動を通じて障がい者と学生、施設と大学という垣根は低くなり、近所のパン屋さんを拠点にした交流は、互いの生活の一部としてなじんでいるように思われる。今後もご近所づきあいのような、日常的な感覚を大切にしながら、自由な発想で活動を積み重ねていきたいと考えている。 (糸井)

<sup>7</sup> 本学と湘南とつか YMCA が構成団体となる「柏尾川魅力づくりフォーラム」の活動に参加。

<sup>8</sup> 横浜 YMCA が支援している東北タイへの支援活動に学生、通所者、アンジュ職員がともに取り組むことが予定されている。また学生たちが途上国支援を目的に取り扱っている雑貨を販売する際に、アンジュから協力が得られるかについて、検討がおこなわれている。

## 戸塚の商店街とのつながり

### ～「とつか・モノじまん」と「戸塚区民市」での活動

東海道の宿場街として歴史の古い戸塚は多くの人口を抱え、大学の最寄り駅である JR 戸塚駅の乗降客数は、横浜駅について市内で2番目に多い。しかし、住民たちの戸塚駅周辺の商店への利用度は高いとはいえず、駅周辺の求心力に課題がある。

そういったなかで、古くからお店を営んでいる戸塚の商店主が商品の魅力を知ってもらおうとネットワークを作った。「とつか・モノじまん」はその1つである。一方、横浜市戸塚図書館が開館30周年記念イベントを開催するにあたり、戸塚図書館から大学の地域連携室に依頼があり、ボランティアセンターが協力を行った。図書館では、記念行事の1つとして、戸塚の歴史ある産業等について、区民に理解してもらおうという企画を立てた。講演会やフィールドワークのほか、11月8日、9日には、「とつか・モノじまん」に登録している商店主達が図書館の求めを受けて、ロビーを会場に、商品の紹介や販売を行った。ボランティアセンターからの呼びかけに応じた学生たちは「とつか・モノじまん」のスタッフの一員として、琴の演奏会場の設営をしたり、地元の農家の人達と一緒に野菜や花を売り協力した。国際協力を行っている学生サークルは、途上国支援を目的としてアジアの雑貨を販売し、地域の人々に支援と協力を呼びかけた。当日集まった学生のなかには、初めてボランティアに参加した学生もあり、学生たちにとっては地域の人々と交流する貴重な経験となった。終わった後の反省会では「これまで自分の家の近所を含めて、地域活動に参加した経験がなかった。今回参加して、地域での活動が楽しいことを知った」と語った学生や、「戸塚で一人暮らしをしているが地域の方と話す機会はなく、戸塚っていいところなんですね」と戸塚の魅力を改めて感じる学生など、学生たちが戸塚地域への関心を持つきっかけとなった。当日の世話人の一人である商店主は「再開発の波に飲み込まれそうで、いつ店を閉めようかとみんな毎日悩んでいるですよ。学生の皆さんが明るく一緒に働いてくれて、また頑張ろうと思いました。学生には本当に感謝しています。私たちは人と人のふれ合いのある商店を街から失わせたくなし、再開発で分断されてしまったままではなく、もう一度地域の結束を高めたいのです」と、学生たちの協力が商店主を励ますことができたことが分かった。



ここでの出会いが縁となり、ボランティアセンターと戸塚の商店とのつながりが強まった。

月に1度戸塚区役所駐車場を会場に開かれる「戸塚区民市」がある。これは、戸塚の良さを地域住民に知ってもらい、再開発で変化を続ける戸塚駅周辺を活気づけようと戸塚区役所の駐車場を会場に商店

主と地域住民が協力して行われているものだ。地元で採れた野菜が出品され、戸塚の老舗和菓子屋や骨董屋さんなど数多くの商店が出展し、子ども向けの縁日も開かれるなど、活気溢れるイベントになっている。

先の「とつか・モノじまん」の活動がきっかけになり、「Action! まずは行動」の方針のもと、ボランティアセンター学生スタッフが「戸塚区民市」に関わることとなった（詳しくは本書「横浜校舎学生スタッフ報告」を参照）。商店街の人たちと共に設営や販売にかかわり、戸塚地域の一員として存在し、行動することを楽しんだ。一緒に働いていた八百屋の奥さんから野菜の料理法を教えてもらい、学生は感激していた。

一方、戸塚図書館の記念行事に参加した学内の国際協力サークルも、区民市に定期的に出店することとなった。こういった活動が定着し、学生たちのブースに毎回訪れてくれる中学生がいたり、途上国支援の為に学生たちが収集している古布や書き損じハガキの提供を申し出てくださるなど、理解と協力関係が生まれている。区民市の隆盛に伴い、学生スタッフは更に明学と地域の連携を強め、盛んにしたいと意欲を持つようになった。最近では、区民市の活気が学生の口コミで広がり、これまで参加していなかった国際協力や環境活動を行うサークルが、区民市への参加を希望するという動きが生まれている。

そうやって、地域の人々が交流を深めている「戸塚区民市」。学生たちが中心となって、区民市にいらした方の交流スペースを作りたい、明学生も企画に携わりたいなど、区民市への意欲は高まっている。

活動の初期段階では、ボランティアセンターのコーディネーターがリーダーシップをとり、学生たちが地域で参加できるような働きかけを行ってきたが、現在では、学生たちの区民市への参加は定着し、学生スタッフは「将来は明学生が中心的な役割を担えるようになって区民市を開催したい」と、意欲をみせている。区民市の将来を考えるミーティングに学生が出席し、商店主や地域の方とともに意見交換を行っている。学生と地域の人々、商店主が協力し合うことで、区民市がさらに発展し、戸塚への愛着が深くなっていくことを願っている。

(糸井)



## 戸塚区役所とボランティアセンターの協力

ボランティアセンターでは学生たちによる地域活動の充実のため、戸塚区役所と協力した活動に取り組んでいる。その1つが「戸塚区と学生の懇談会」である。懇談会が始まった昨年に比べると地域と学生、大学の日常的な交流が活発になり、懇談会のようなフォーマルな場を利用せずとも意見交換などをおこなえる関係が生まれていたため、今年度は回数を減らし7月と3月と2回開催されることとなった。今年度は多くの学生に懇談会に参加してもらおうと電子掲示板で呼びかけを行った結果、新たなサークルや社会人学生などが懇談会に加わった。7月の懇談会では「戸塚区民まつり」にJUNKO Associationが参加し、「手話サークルぽっけ」は「ふれあい文化祭」で手話歌を披露したり、聴覚障がいのある子どもが在籍している舞岡保育園で手話歌や簡単な手話を紹介することが決まった。

一方、国際協力を行う学生のサークルからは戸塚駅周辺で途上国支援を目的としたアジア雑貨の販売ができないかという要望があり、その結果秋からはじまった「戸塚区民市」（詳しくは本書「戸塚の商店街とのつながり」のページを参照）での出店が実現し、また大学正門のすぐそばにある「パン工房アンジュ」（詳しくは本書「横浜 YMCA ワークサポートセンター『パン工房アンジュ』を拠点とした交流」のページ参照）を拠点とした国際協力活動の可能性を検討していくことになった。<sup>9</sup>

2つ目は、昨年よりボランティアセンターが参加していた「柏尾川魅力づくりフォーラム」に明治学院大学も構成団体となり、区内の小学校や福祉施設、企業、YMCA、柏尾川の環境保全をしている市民グループとともに、柏尾川の魅力づくり活動を進めている。「柏尾川クリーンアップキャンペーン」として、年に数回の清掃活動のほか、柏尾川に生息する生物の観察、周辺の花壇整理などを行っている。夏に開催予定だったこの行事が雨のため中止となってしまったが、次回開催の春には、アメリカンフットボール部や学生スタッフをはじめ、多くの明学生が参加する予定となっている。

以上のように戸塚区とボランティアセンターの協力関係は進展し、11月に白金キャンパスで開催された「ボランティアファンド学生チャレンジ賞」の助成企画による中間報告会には、戸塚区区政推進課長の住吉氏ほか、戸塚地域から多くの人々の来場があり、学生たちの活動に期待と関心を寄せてくれたことが分かった。今後は地域の人々との協力関係をもとにして、戸塚地域の発展につながる活動を積極的に推進していきたいと考えている。 (糸井)

<sup>9</sup>懇談会に参加していたサークルが懇談会での議論に触発され、「戸塚商店街でのフェアトレード商品販売」を企画した。この企画は第8回「ソニーマーケティング学生ボランティアファンド」から助成金を獲得するなど、新たな地域と学生の協働活動がスタートするという波及効果をうんだ。

## ボランティア相談に関する考察

### 1. 相談受付カードからみる学生の相談傾向

ボランティアセンターでは、ボランティア活動に関する相談に対応している。長期休み中に参加する海外ボランティアを探している学生、ボランティアを始めてみたいが、どれにするか決められない学生。また、「海外支援のため駅前で募金活動をおこないたいが、どうしたらいいですか」など、学生たちから寄せられる相談は多様だ。センターの機能や学生の利用状況を知るために、学生たちはどのような内容を相談するためにボランティアセンターを訪れているのか、実態を把握する必要性を感じている。しかし、入れ替わり立ち代り来室してくる学生たちのすべての相談を記録に留めることは難しい。そこでまず、今年度ボランティア相談に訪れた学生の相談受付カードを整理することを通して、相談内容や相談者の傾向を明らかにしたい<sup>10</sup>。

まず、簡単にボランティア相談受付カードの説明をしたい。相談カードには学籍番号と名前、相談内容、コーディネーター記録欄<sup>11</sup>が設けられている。相談時にこのカードを利用することにより、再来室の学生に前回の相談内容を踏まえて話ができる、コーディネーターが学生一人ひとりの基本的データを記憶する際の助けとなるなどのメリットがある。希望したボランティア活動がその場で紹介できない場合、連絡先を記入してもらったカードとして役立っている。なお、相談受付カードに記入することが、コーディネーターにとっても学生にとっても必須ではないため、相談にのったすべての学生が相談受付カードに記入しているわけではない。授業開始時刻が迫り急いでセンターを後にする場合やセンターが込み合っていて相談カード記入の依頼ができないケースなどもある。

今回整理をおこなうのは2008年4月～12月に新たに対応した相談受付カード99件である。ボランティア情報のチラシ等の閲覧のみの学生や2008年4月以前にも相談に訪れているケースは除いた。

相談者を学年別にみると、1年生が64%と最も多い。続いて2年生が21%、3年生が13%、4年生が2%となっている。横浜校舎は1、2年生と国際学部生が学んでいるキャンパスであるということ、また最近では社会学部や経済学部などで2年生から白金開講科目を多く設置していることが、その理由であるだろう。

学科ごとにみると、4年間横浜キャンパスに在籍している国際学科が29%と最も多く、続いて社会福祉学科(23%)、英文学科(15%)と続く。続いて利用が多いのは政治学科(7%)、社会学科(6%)である。一方、法律や国際経営の学生は全体の約2%しかいないことは、学科によって大きく偏りがあることが明らかになった。その一方、相談学生がいない学科はなかった。

月ごとにみると、新入生が入学した4月と、新学期がはじまった10月の相談件数が多い。夏休み前は

<sup>10</sup> 「ボランティア相談受付カード」は2007年度から作成されているが分析を試みたことはなかった。

<sup>11</sup> 学科や自宅のある地域、関心のある分野、紹介したボランティア活動のほか、事後連絡用にメールアドレスや電話番号を必要に応じて記録している。

活動を探す学生が多いので、ボランティア活動を紹介する説明会を開催するなど個別相談以外に学生のボランティア活動紹介に対応する機会が豊富なこと、一度に多くの学生が来室しているため、記録に応じてもらいにくかった事情があったのではないかと考える。

男女別では女子学生の利用が81%である一方、男子学生は19%であり、男女比が極端に大きい。相談内容については、国際が36%で全体の3分の1以上を占め、子どもが21%、環境と高齢が各々8%、障がい7%、病院2%、心理、音楽、動物も各々1%、ボランティア相談全般14%であった。学生の関心が高い分野が国際、子ども、環境という傾向は、ボランティアセンターが毎年4月におこなっている新入生アンケート<sup>12</sup>で回答があった関心分野と同じ傾向を示している。

以上、相談受付カードを通してみえた相談傾向を述べてきた。データとして不十分ではあるが、センターに相談しに来ている学生たちの傾向をつかむことができたのではないかと考える。

最後に今回の相談受付カードの整理からみえた傾向とその対応を考えたい。1つ目は、センターに相談に来る学生は、学科ごとに大きく開きがあること、来室者が少ない法律学科や国際経営学科、芸術学科や仏文学科の学生には、ボランティアセンターの認知と活動への関心をもってもらうような取組が必要だということが明らかになった。次に、センターに来室する学生は新入生に限らず、4月や5月の時期に多いことが明らかになった。特に4月、5月の時期にボランティアセンターの活動やボランティア先の紹介に、力を入れていくことが必要である。3つ目は、相談者の半数以上が1年生であることから、1年生の参加が促進されるような取組みをセンターがおこなう必要があることが分かった。4つ目に、この相談受付カードは相談内容が自由記述になっているため、学生の記入が「ボランティアの相談」というような漠然としたものになってしまう傾向がある。相談内容の選択肢をあらかじめ設定しておき、学生のニーズがより分かる形式に相談カードを改良する必要があると考えた。今回は新規のボランティア相談受付カードの整理を試みたが、その後の動向や学生へのフォローアップの取り組みについて、記録化し整理していきたいと考える。

## 2. ボランティア相談が活動支援につながった事例

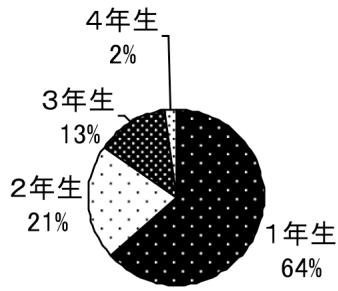
ボランティア相談がきっかけとなり、コーディネーターが活動に対するアドバイスを行うことで動き出した活動がある。戸塚近隣在住の外国につながる子どもへの学習支援をおこなう「こ・こ・ろ」<sup>13</sup>、タイの山岳民族の保健衛生及び環境啓発に取り組む「あちよみだ」<sup>14</sup>である。ともに学内外の助成金を得て社会的にも評価・支援される団体として育っている。ボランティアセンターによるインキュベーション（孵化）機能が発揮されるような支援を今後とも充実させていきたい。（糸井）

<sup>12</sup> 新入生アンケートについては、本書「新入生のボランティア意識」を参照。

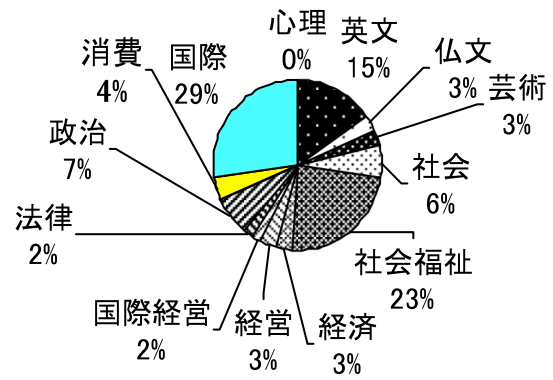
<sup>13</sup> 詳しくは、本書「ボランティアファンド学生チャレンジ賞」を参照。

<sup>14</sup> 第8回ソニーマーケティング学生ボランティアファンドの助成を受けた。

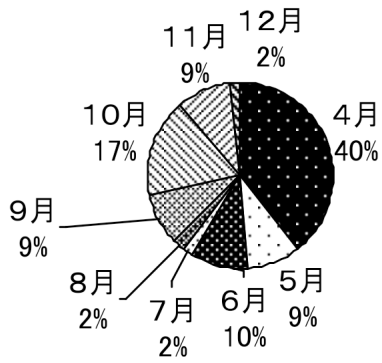
### 学年別



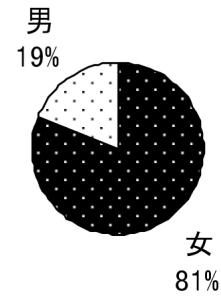
### 学科別



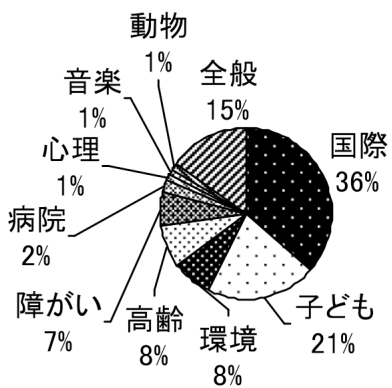
### 月別



### 性別



### 相談内容



## 横浜校舎学生スタッフ活動報告

2008年度、横浜学生スタッフは新スタッフ16名を迎え、総勢25名で活動おこなってきた。学生にボランティアを身近に感じてもらえるようにするために、新入生にボランティアサークルを知ってもらう「ボランティア系サークル合同説明会」の実施や、ボランティアの魅力を伝える「ボランティアセンター通信」の発行をおこなった(表1参照)。学生スタッフお勧めボランティアや、ボランティアを体験した感想を伝える「みんなのあしあと」は、学生の視点でボランティア情報を紹介することで、より立ち寄りやすいボランティアセンターにするためにおこなった。掲示版の装飾や情報の書き方を工夫し、見やすく分かりやすい情報の提供を心掛けた。ボランティアセンターに訪れた多くの人が見てくれたので、今後も常に新しい情報を掲示できるようにしていきたい。12月には横浜学生スタッフのホームページを開設し、学生スタッフの活動を学内外に伝えることもはじめた。昼休みにおこなっている学生スタッフがボランティア相談にのるコーディネート活動は、より自信を持って行えるように、ボランティアファイル更新をセンターの職員と一緒にこない技能の向上を目指した(表2参照)。その結果、大学周辺のボランティア先を記載した地図を作成したり、積極的に声かけをおこなったりという工夫が出来るようになってきたと思う。しかし、まだ実践に結びつけられないスタッフも多い。自分の得意分野をつくっておく、相談に来た学生にすぐ対応するという行動を、学生スタッフの誰もが出来るようにするのが今後の課題だ。

今年度は、学生スタッフ自身がまずはボランティア活動の経験を積もうと、栄区にある荒井沢緑営塾の農園での農作業体験、倉田小学校のはまっ子スクールでの放課後支援や下倉田地域ケアプラザでの障がい児余暇支援等、これまで明学生とつながりがあった活動先でのボランティアに参加した。学生スタッフの中には、これまでボランティアをしたことのなかった人もいたのだが、ボランティアを身をもって知り、自分の中でのボランティア観が出来たことで、スタッフとしての活動に強い意欲を持つきっかけになった。また、ボランティア経験のあったスタッフも様々な分野の活動にふれることや、地域の方と関わることで、改めて人と人との関わり合うボランティアのすばらしさを感じた。その経験をいかして計画されたのが、「Let's Try! ボランティア」である(表1参照)。荒井沢緑栄塾や下倉田地域ケアプラザと連絡をとりあい学生スタッフと一緒にボランティアに参加できる機会をつくったり、手話講座を企画したりしてボランティアへの参加を促した。スタッフの経験不足により広報が十分にできなかったことなどから計画していたことが実現できず、企画実施の難しさ知ることとなったが、ボランティアは敷居の高いものではないと感じてもらえたり、この活動に参加したことから学生が定期的に農園を訪れるようになったりしており、企画の目的である、ボランティアを始めるきっかけづくりをおこなうことは達成することができた。

このように学生にボランティアを身近に感じてもらおう、という活動方針のもと一年間活動してきた

結果、一つひとつの企画を通して学生とボランティアを繋ぐことが出来た。またそれだけではなく、戸塚地域の活動に参加したり、明学内にあるサークルと連携した活動をおこなったりしたことが刺激となり、地域との関係づくりやボランティア活動をしている学生と繋がっていくといった、新たな学生スタッフの活動意義を見つけだせた一年であった。

表1 <<企画・イベント>>

	目的	企画の実施報告
ボランティア系 サークル 合同説明会	ボランティアに取り組む1つの手段として、ボランティア系サークルへの参加を促す。	4月に2日間実施した。ボランティア系のサークルを集め、発表形式と、ブース形式の2つの方法で活動紹介してもらった。当日は100名近くの新入生の参加があった。
Let's Try! ボランティア	ボランティアに興味があるが、なかなか初めの一步を踏み出せない学生のためにきっかけ作りを行う。	栄区の荒井沢緑管塾の農園での農作業体験、手話サークルほっけの学生の協力を得ておこなった手話講座、戸塚区内の下倉田地域ケアプラザでのボランティアなどの活動を春と夏に実施。学生スタッフが受け入れ先との調整や、参加者募集を行った上、一緒に活動をおこなった。参加者から好評をも得ることができた。
ボラセン☆通信	学生に、ボランティアの良さを紙面で伝える。学外に向けて学生スタッフの活動を紹介する。	実際にボランティアしている人の声を伝えようと、ボランティア系サークルの学生と学生スタッフとの対談や、明学生のボランティア体験談などを載せた春号を発行。読者に興味を持ってもらえる読みやすい記事の作成を心がけた。新入生に向けて、ボランティアを通して地域とつながっている明学生を紹介する臨時号の発行を4月に予定している。

表2 <<年間を通しての活動>>

	目的	活動報告
コーディネート	学生スタッフが対応することで、学生が利用しやすい雰囲気を作る。学生が目線でボランティア相談にのる。	学生スタッフが昼休みにボランティア相談に対応する時間を設けた。横浜校舎周辺のボランティア先を記載した地図の作成を行ったり、センターの職員の方が行っているボランティア情報ファイルの整理を手伝ったりして、学生スタッフのコーディネート技能の向上を図った。
学生スタッフ お勧め ボランティア	ボランティアセンターに訪れた学生に、情報をわかりやすく紹介する。	学生スタッフがおすすめするボランティア情報を、センターの入り口付近に掲示した。多くの学生に見てもらえているので、常に新しい情報を提供するよう心掛けている。
みんなの あしあと	ボランティア体験談を紹介することによって、ボランティアの魅力を伝える。	ボランティアを通して感じた楽しさや気づきを書き込める「あしあとノート」を設置。代表的な感想はカードに書き起こして掲示して紹介した。認知度が低く、より多くの人に感想を書いてもらえるようにすることが課題である。

## 今後の活動方針

これまでの活動を踏まえて、2008年12月より今後の学生スタッフの活動の方針を徹底的に話し合うミーティングをおこなっている。その結果、これまでの活動に加えて、学生スタッフ自らが地域を拠点に活動することにより、学生スタッフが「明学生と地域との架け橋になる」という目標を持って活動をおこなっていきたいということになった。昨年末から関わり始めた「戸塚区民市」や「パン工房 Ange」との交流会など（表3参照）に私たち学生スタッフが今まで以上に積極的に参加していくことで、地域の方々にとってより明学生が身近に感じられる存在になっていくと思う。また、学生スタッフが他の明学生に地域イベントへの参加を呼び掛けていくことで、「明学生と地域との交流が拡大し、戸塚地域が活性化される」と私たちは考えている。そのためには「Action（まずは行動!）」というスローガンを持ち活動を進めていきたい。

そして、「地域と明学生との架け橋」という目標を実現し、地域の方々と明学生との間に信頼できる関係が確立された後には、私たち明学生が「地域密着型イベント」を企画・運営できるように取り組んでいきたい。私たちが考えている最終地点である「明学生と地域との架け橋」という目標に向かって Action の精神を忘れずに、私たちボランティアセンター横浜学生スタッフは活動を進めていく。

表3 <今後の活動計画>

	目的	現在の活動	今後の展開
パン工房 「Ange」	明学から数分という場所に位置しているため、身近にお互いを感じていけるような交流を実現する。	パン作りのお手伝いに行っている。また、「Ange」の方々と共に大学でパン販売、交流会など実施している。	「Ange」の方々と共に行うイベントなどの企画し、より明学生との交流の場を増やしていく。
戸塚区民市	私たちが通っている戸塚の区民の方々と明学生の交流の場を増やし、学生にも積極的に戸塚区活性化に参加してもらう。	毎月、戸塚区内で行われる「区民市」にスタッフとして参加。	戸塚区民市に積極的に参加していく。
戸塚高校出張 ボラセン	学生スタッフがおこなっているボランティア活動を紹介することで、ボランティアを身近に感じてもらう、また参加を促す。	戸塚高校へ赴いて、学生スタッフがおこなっている戸塚地域の活動紹介や大学紹介をおこなった。	ボランティアを紹介するだけでなく、高校生と一緒に参加できるように企画していく。

(横浜学生スタッフチーフ 2年 鈴木彩 1年 橋本貴広)

## ボランティアファンド学生チャレンジ賞 2008 について

今年度 2 回目を迎えたボランティアファンド学生チャレンジ賞（通称「ボラチャレ」）は、2008 年度については「明学生」「ボランティア」「地域貢献」をキーワードに、「明学生のボランティアによるキャンパスのある身近な地域での地域貢献活動」をテーマとして企画募集を行った。4 月 14 日から 6 月 6 日までに応募を受けつけ、結果として 13 団体から 14 企画の応募があった。昨年度初回は 2 団体 3 企画の応募であったことからみると、テーマの変更もあるものの、学生間に学生チャレンジ賞の存在が浸透しつつあることが伺えた。

6 月 21 日に公開審査会を開催し、各企画のプレゼンテーションを行い、その後開催された審査委員会（大西学長、梅田義明活動推進委員、センター長、センター長補佐）による審査が行われた。審査委員会では応募企画について、「明学周辺への地域貢献度」「その活動の波及効果」を中心に評価した。また当然ながら、その企画の独自性や先駆性ととも、実現可能性についてもあわせて評価した。結果として 5 企画のチャレンジ賞が選ばれ、最高 10 万円の奨励金が授与された。さらに受賞には至らなかったが今後への期待をこめて「チャレンジ期待賞」1 企画が、プレゼン参加者からの投票により「オーディエンス賞」1 企画がそれぞれ選ばれた。

今年度は「キャンパス周辺への身近な地域でのボランティア活動」が応募条件となっていることもあり、戸塚、白金のボランティアセンターにおいてフォローアップも含めて、受賞企画の実践への支援を行っていくこととなり、引き続き、それぞれのコーディネーターによるアドバイスやサポートを行うこととなった。また 11 月 19 日には「ボラチャレ中間報告会」が開催され、受賞 7 企画の活動中間報告が各団体によるプレゼン形式で行われた。この報告会では、ゲストとして「クリエイティブアート実行委員会」の小堺直子さんをお招きして、「コミュニティ・アート活動の可能性」についてご自身の学生時代のボランティア体験と現在の NPO としてのコミュニティ・アート活動について、実践家ならではのお話を伺うことができた。受賞団体同士の情報交流の場にもなり、このような受賞団体に対してのフォローアップの機会を持つことは重要であると思われた。

各団体の活動報告は次ページ以降掲載されているとおりであるが、今年度だけの活動にとどまらず、ぜひ今後も今回の企画を大事に育てて、地道な地域交流活動を展開し続けていただきたいと願っている。またセンターとしても、受賞活動の維持発展を応援し続けていきたいと思う。 （茨木）

## 戸塚在住で外国につながる人々への学習支援と交流ボランティア

「こ・こ・ろ」は戸塚近郊在住で外国につながる人々への学習支援やイベント企画を行っています。企画代表者が過去2年間行っていた家庭教師ボランティアの経験を通して、その人の将来の可能性を広げられる学習支援の大切さを感じていました。そこで大学近郊で学習支援を必要とする人がいるならそれに応えたいと思い情報を探していたところ、戸塚にあるボランティア団体「ユッカの会」と出会い、そこに通う子どもたちが学習支援を必要としていることを知りました。さらに外国につながる人々を対象とした学習サポートに関心を持っている明学生が多くいることを知り、サークル活動を始めようと思案しました。学習支援で教える学習者のペアのコーディネートとイベントに参加する子どもたちの紹介は「ユッカの会」に協力していただく形で進めています。ボランティアセンターからボラチャレ申請の勧めをいただいたこともサークル立ち上げの後押しとなり、また1年間を通して活動全般に対する積極的な助言をいただいたことは大変強みでした。「こ・こ・ろ」という名前には、学習者と私たち学生のこころとこころがつながっていくような信頼関係を築いていきたいという思いがこめられています。

こ・こ・ろは学習支援とイベントの2本柱で活動しています。学習支援は基本的に週に1回1時間程度、学校帰りに戸塚駅または横浜駅周辺で国語・英語・数学などの教科や日本語を教えています。こ・こ・ろのメンバーには、学習支援報告書というものを作成し、活動終了後に各自記入するように義務づけています。これは、日々の学習支援の様子を記録に残すことで、今後別の学生が担当になっても学習者に関する情報を得ることができ、より良い学習支援につながることを期待するためです。週に1回のミーティングでは、この報告書を元に個人で担当している学習者のペア、勉強の内容、教える上での工夫について皆で報告し合うことをおこなってきました。

学習支援の課題としては、「学習支援はなぜ必要なのか」という意義を理解して活動するところまではなかなか到達していないことだと感じています。ただ教えるだけではなく学習者の抱えている問題についてももっと関心を持ち、ユッカの会からゲストスピーカーを招いたり、自主的な勉強会をおこなうことで充実した学習支援につなげていくことが必要だと考えます。

イベントではまず子どもたちへの学習支援の基盤づくりのため、まずは楽しく触れ合いたいと考え8月に「こころをつなごう！夏のお楽しみ会」と題して一緒にゲームやお菓子作りをする交流会を開きました。中国にルーツをもつ小学生から高校生までの10名の子どもたちと「ユッカの会」のスタッフが2名引率として、参加しました。来日したばかりで日本語がわからない子どももいて戸惑うこともありましたが、言葉ではなく態度でコミュニケーションをとろうとする積極的な姿勢が大切であることを学んだ1日でした。この交流会がサークル立ち上げの起爆剤となり、また学習支援を必要とする子どもたちとの初顔合わせの機会となりました。

次に、外国につながる高校生を対象とした「明学プチキャンパスツアー2008」を実施しました。高校

生が3名、「ユッカの会」からの引率が2名計5名の参加がありました。これは高校生に明学を知ってもらうことで、大学進学を含め、将来を真剣に考えるきっかけとなってほしいという目的のもとに企画しました。レベル別の英語授業や比較政治学の見学、ボランティアセンターでのこ・こ・ろの活動紹介、高校生と同じ文化的背景をもつ明学生を呼んで高校生の進路について話し合う昼食会、キャンパス案内等を行いました。当日は授業があるため、限られた学生しか高校生たちの対応ができなかった、という難しさもありましたが、こ・こ・ろならではのキャンパスツアーを行うことができたのではないかと感じています。今後は学習支援もイベントも、学習者への理解を軸にして進めていくことが大切だと思います。

活動全体を振り返ってみて、学習支援は個人でもできる活動ですが、サークルとして活動することによって、ミーティングでの報告や勉強会を通して学習支援をおこなっていく上での課題を解決し、より質の高い学習支援を目指すことができるという意義をサークル全員で共有することがこれからの課題です。それがまた地域からのニーズに応えることでもあると思っています。外国につながるといっても背景によって抱える問題も様々なので一人ひとりの気持ちを理解し尊重すること、そこに明学生らしさ(年齢が近いなど)を発揮すること、それが私たち学生に求められているのだと認識しています。

以上のような活動の成果と課題をふまえ、今後は学習支援を中心とした国際交流を通して、外国につながる人々の可能性を広げるという理念のもとに、学習支援とイベントを通して外国につながる人々が自信を持って自分らしく生活していけるような活動を展開していきたいと考えています。



(国際学部国際学科3年 須藤 順子)

## 学生団体 SUCCEED ～Do For Others Cycle～

### 1. 学生団体 SUCCEED とは

目的意識の高い明学生で構成された学生団体である。向上心と野心をもち何事にも果敢にチャレンジしていくベンチャー精神と社会のため、人のために尽くすという明学の精神でもある「Do For Others」に沿った活動を基盤としている。

### 2. 団体設立のキッカケ

団体設立をする以前、私は他大学の学生と共にイベントを企画・運営や、某大学（以下、K大学）主催のビジネスコンテストへの参加をしていた。そして、K大学と本学との違いを大きく2つ感じた。1つは、OB との繋がりである。KにはOBが学生の活動を支援する仕組みがあった。もう1つは、学生の意識の違いだった。K大学では学生主導の活動が活発であった。その差を強く感じ、明学生主導の活動を通し、少しでも変化させたいと思い、2006年に学生団体を立ち上げた。

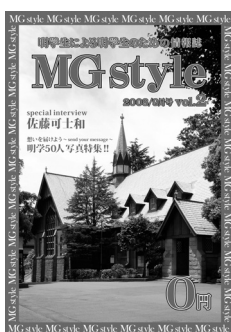
### 3. 受賞企画の概要

今回受賞した企画は、明学総合情報誌フリーペーパー「MGstyle」の企画と発行である。この企画の目的は2つある。1つは、フリーペーパーという媒体を通して、明学生の繋がり、大学と社会との繋がりを更に密にしていこうという試みである。もう1つは本学の魅力をもっと学生に知ってもらい、更に大学生活に興味をもってもらうきっかけ作りである。今回は第2号という事もあり、作業はスムーズに進めることが出来た。

### 4. 受賞の成果と今後の展望

今号においてはボランティアセンターと広報室のご協力もあって、OBへのインタビューやフリーペーパーの学内設置、オープンキャンパスでの配布も可能となり、団体としての活動の幅が益々広がった。また、フリーペーパーの学内設置に関しては、今回の受賞を機に実現することができた。そして「MGstyle」は学内教職員をはじめ、多くの学生の目に触れることが可能になった。これによって「大学」「学生」「OB」をフリーペーパーという媒体を通して繋げることができたと考える。

今後も「MGstyle」のコンテンツを練り続けながら継続させることで、「Do For Others Cycle」を学内へ、そして社会へ向けて広げていきたいと思う。



「MGstyle」第2号は下記のアドレスから閲覧可能です。

<<http://voluntee.meijigakuin.ac.jp/student/mgstyle.html>>

「その他の詳細については、下記アドレスもご参照ください」

【公式 HP：<http://succeed.0web.cjb.net/index.html>】

【活動ブログ：<http://mgsucceed.blog.shinobi.jp/>】

（法学部法律学科4年 佐藤 祐太）

## 小田急プロジェクト あったかサークルひまわりプロデュース～あったか交流会～

あったかサークルひまわりはボランティアセンターの小田急プロジェクトにより、2008年1月に立ち上がったばかりの新しい団体です。小田急分譲地で主にデイサービスや茶話会、公園清掃の手伝いをしています。小田急分譲地とは明治学院大学の横浜校舎北門を出たところに広がっている住宅地で2000人以上の方が暮らしている場所です。

私たちはこれまでボラチャレ企画として「あったか交流会」というものを実施してきました。明治学院の学生は地域の方の協力のおかげで快適な学生生活を送ることができています。交流会を通し、地域の方にその感謝の気持ちを伝え、一緒に楽しい時間を過ごすことで学生を身近な存在に感じてもらいたいと考えています。学生と地域の方が実際に会い、話すことによって、双方にとって住みやすい地域とはどういうものなのか考える機会になればよいと思い企画しました。交流会の活動として、夏にはサロンすみれという茶話会の中で「朗読会<sup>15</sup>」、「思い出アルバム<sup>16</sup>」、しあわせの会というミニデイサービスの中で「明学こどこ！？絵合わせゲーム<sup>17</sup>」をおこないました。現在は小田急分譲地の住民の方を横浜校舎内にあるMGカフェに招待して茶話会を開く計画を立てています。大学は住民の方にとってなかなか関わる機会がないため、「近くて遠い存在」なのではないでしょうか。みなさんを招待することで大学は学生だけでなく、住民の方も安心して活用できる場所だと感じていただき、もっと気軽に足を運んでもらえるようになればよいと思います。そして、大学が地域と学生を繋ぐ場所になることを願っています。その一歩として、学生が地域の方を大学へ案内する取り組みを始めています。これまで私たちは地域の方と打ちとけること、明学生に横浜校舎周辺の地域について知ってもらうことなどを目指してきました。現在は地域の方との繋がりができたことにより、夏祭りへの参加など活動の幅を広げることができました。また、ブログの作成や活動記録やチラシのボラセンへの設置、説明会の開催を通して学内での存在感をアップさせることもできました。企画を始動した頃は地域の方対象の大きなイベントを実施することばかりを考えていましたが、私たちが活動している場所は地域の方にとっての「生活の場」であり、それまで築かれてきた雰囲気を壊すことなく、地道で継続的な取り組みをしていくことが大切だと学びました。今後はもっと多くの学生に活動に参加してもらい、明学生と地域の繋がりを保っていくこと、地域の方と学生と一緒に楽しめる活動していくことを目標としていきたいです。これからも地域の特性を活かし、学生ならではのボランティアを展開していきたいと思います。

(社会学部社会福祉学科3年 梅澤由佳里)

<sup>15</sup>私たちの選んだ詩を利用者の方と一緒に朗読。

<sup>16</sup>学生が参加した地域の夏祭りやミニサービスなどの様子を写真で紹介

<sup>17</sup>神経衰弱ゲームを通して大学のことを紹介

きっかけはボラチャレ

私たちの活動団体に「MG☆SUZU」という名前がついたきっかけは、このボランティアフェンド学生チャレンジ賞（以下ボラチャレ）への応募である（活動の詳細は30ページを参照）。ボラチャレの応募用紙に団体名を記入する欄があり、その際に考えてつけたものなのだ。実はこの時はまだ、メンバーは私一人という状況で、団体と呼べる状態ではなかったため、「支援金がほしい。」というよりは、「少しでもこの活動を知ってもらい、新メンバー加入につながれば。」という思いの方が大きかった。しかも、私はこれまで人前でプレゼンテーションなどしたこともなく、不安でいっぱい選考会だったが、ボラチャレの応募を機に出会った先輩や仲間助けられ、自分でも信じられなかったが支援金を頂くことが出来た。このような選考会の後の中間報告会という、「人前で発表する」機会は、私に大きな刺激を与えてくれ、自信にも繋がると今振り返ってみて改めて強く感じる。

MG☆SUZU がボラチャレで応募した企画は「アートプロジェクト」というものである。MG☆SUZU が活動している高齢者と知的障害者のための複合施設である「福祉プラザさくら川」には、素敵な魅力を持った利用者の方がたくさんいらっしゃる。私はその魅力をアートという誰もが心で感じることでできるもので表現出来たらと考えた。そこで、アートを創っていく中で利用者さんと学生が交流を深め、交流の時間を利用者さんに楽しんで頂き、そういった過程で完成した作品を通して利用者さんの魅力を地域に発信していきたいということを、このプロジェクトのコンセプトにした。

しかしながら、このプロジェクトを企画した段階では、利用者さんの様子というものを全くと言って良いほど理解しておらず、全ては頭の中で考えたものであった。そこで、施設の方からも指摘を頂いて、従来の茶房さくら川での活動に加え（茶房さくら川については30ページを参照）10月からは施設内の特別養護老人ホームでボランティア活動に参加するようになった。しかしそこで、私たちが考えていたものとのギャップに悩まされた。当たり前のことだが、利用者さんには一人一人個性があり、その個性にあった制作活動を考えることは難しい。私たちが何かを「作らせる」のではなく、利用者さん自らが「作りたい」と思うものを制作しなければ意味がないのだ。そのきっかけとなるものを私たちは日々考え、色々なもので工夫しながら挑戦している。そんな中で粘土を使ってみたところ、私たちが考えつかないよう作品が生まれたり、レンコンの断面に色をつけ、半紙にスタンプの要領でベタベタとおすということを行ったところ、とても個性豊かな作品ができあがったりと、毎回新鮮で新しい発見が生まれるようになった。3月末には、ボラチャレで頂いた支援金で学生が用意した木に、このように創られた利用者さんの「アート作品」を花に見立てて、施設と大学内で展示することを計画している。正直、どんなものになるか全く予想がつかない。しかし、この木が春にどのような花を咲かせるか、わくわくしながら私たち MG☆SUZU は動いている。

（社会学部社会福祉学科2年 依田 ツカサ）

## 港区白金発！明治学院大学学生×白金志田町倶楽部の草の根的協働のモデル

### ○はじめに

白金志田町倶楽部（以下、志田町倶楽部、参照HP：<http://www.ifaps.org/kai.html>）は、「新しく住む人」「古くから住んでいる人」「働きにきている人」そして「離れていても、このまちや人に親しみを持つ人」など、白金地域に愛着を持つ人々が集まり、共に白金地域の活性化を目指す団体である。本学がある白金という町で明治学院大学の学生だからこそこできる活動を行いたいと学生有志らが集まって、2008年4月から志田町倶楽部の活動に参加し、2008年6月25日に白金志田町倶楽部明治学院大学学生チームが正式に発足した。私たちは①地域の活性化を目指した地域住民と明学生による草の根的協働活動のモデルの創造②地域で学生が主体的に活動することができる場の構築を目指し活動している。奨励金は、活動の際に着用する志田町倶楽部オリジナルウインドブレーカー、Tシャツに充てた。学生が活動の際に着用することで、地域の方へ安心感を与え、学生のモチベーション向上の効果が見られた。

### ○活動内容

白金の町の中で明学生が志田町倶楽部の方々と今後長期的に協働をしていくための基盤を築くために2つの軸で活動を行ってきた。1つ目は、志田町倶楽部の活動への日常的な参加である。5月に行われた「第2回シロカネストリートフェスタ」への運営準備段階からの参加、東京・白金と西アフリカ・ブルキナファソの子どもたちをつなぐ4者間同時中継プロジェクト（志田町倶楽部×世界銀行×JICA×明治学院大学学生チーム）の開催に向け、イベント当日のオープニングムービー作成の為に打ち合わせや、防犯防火パトロールへの参加、新年の餅つきなどに参加した。このように志田町倶楽部の方と明学生が同じ現場で活動することによって、お互いに信頼関係が芽生えたのではないかと思う。2つ目は、学内に向けた活動の広報である。具体的には、明治学院共通科目「ボランティア学3」や白金学生スタッフ主催合同説明会<sup>1)</sup>での呼びかけ、志田町倶楽部、教員、ボランティアセンターコーディネーターと明治学院共通科目「ボランティア学2」で協働した。これらを通して興味を持ってくれる学生が増えてきたが、教職員の方との交流がまだまだ少ないように思う。ボランティアファンドというシステムを大学が取り入れているだけに、学生の活動が教職員の中で周知がないことは残念に思った。

### ○最後に

日々お世話になり、受賞をHP上にまで発信してくれた志田町倶楽部の皆様、親身に相談に乗ってくれたボランティアセンター及び大学機関の方々、多忙な中学生の可能性を最大限引き出せるよう本気で向き合ってくれた李コーディネーター、そして活動に参加してくれた学生。この活動は、「少しでも力になるのなら」という想いで協力してくれた方々が、自分の出来ることを積み重ねた結晶だと思う。この場をお借りして心から感謝の意を申したい。

（心理学部心理学科3年 山田純平）

<sup>1)</sup> 詳しくは本書「白金校舎学生スタッフ活動報告」を参照。

## 明学防災 ～かまどを囲もう～

この企画は広域避難指定区域となっている明治学院大学で、学生や地域の人々をまきこんで、災害時に備えたかまどをつくろうというものだ。もし大学内にいるときに地震にあったら・・・水道、電気、ガスが止まったとしたら・・・何千人の学生や教員、職員がパニックに陥るだろう。そのために防災訓練は必要であるが、「防災」と聞くとほとんどの学生は面倒くさく思ってしまうのではないか。そこで学生がもっと楽しんで積極的に防災に関われる「かまど作り」を提案した。大学内にかまどがあれば、定期的にかまどを使用するイベントなどを開き、学生や地域の人々が交流する場を提供することができる。さらに、学生が地域の人々と電気、ガスに頼らずかまどを使って食事を作り、協力することを共に経験し、本当に災害が起こったときに冷静な判断をし、手際よく行動できる人を育てることにつながる。このような大学内にかまどを設置することの重要性は理解されたものの、火気を使用する設備を大学内に置くことは、維持管理の点や法律的な点で難しく、大学にかまどを作ることは断念した。

そこで私たちは大学内にかまどを作らずにその重要性を知るために、大学近くの舞岡公園の小谷戸の里で、かまどを使ってもちつきをした。舞岡公園の指導員の方にかまどで火をたく方法や作業の手順などを学んだ。普段使っているガス、電気コンロとは違い、火を絶やさず見張らなければいけないし、もち米を炊く時間もしっかりチェックしなければいけない。電気やガスがないと1人分の食事を作ることでも大変だということを実感した。この舞岡公園での経験をもとに、今度は大学でもちつきを行った。他の学生にもこの体験をしてもらい、災害時の心得を共有することができた。

また、12月に戸塚駅前で行われた「冬至キャンドルナイト in Totsuka」に参加し、キャンドル作りなどのワークショップを行った。停電時はろうそくやコンロなど「火」を使って過ごすことが想定されるが、近頃の子供たちは火に親しむ機会が少なく、マッチはおろかライターを点けることさえできない子どももいるという。そこで、ろうそく作りワークショップやキャンドルアートと一緒に火を点けるといふ「遊び」を通して子どもたちが火の扱い方を学び、火に親しむきっかけを作った。防災やかまど作りという点からは少し離れてしまったかも知れないが、この企画を通し、学内にとどまらず地域へと活動の域を広げることができた。

本来の企画案であった大学内にかまどを設置することは達成できなかったが、学内外のイベントで学生同士や地域の人々と交流し、防災について理解を深めることができた。楽しく防災というコンセプトのもと、地域、学生をまきこんで発信することの重要性を学んだ。今後も大学内で今回のもちつきイベントのような防災に関するイベントをしていくとともに、地域とのつながりを様々な活動で生かしていきたい。

(国際学部国際学科2年 原みずほ)



## トング Day ～明治学院大学生と地域住民による地域清掃

私たち Reople（リープル）は環境や農をテーマに取り組んでいるサークルである。今回のボラチャレでは、地域の清掃活動「トング Day」を企画した。トングとは清掃の時にゴミを拾う道具であり、トングを使ってゴミ拾いをする日ということで「トング Day」と名付けた。

明学生は通学する際住宅街の中を通るため、学生が大勢歩くことで話し声による騒音や、ゴミを落してしまうといった迷惑を周辺住民にかけてしまっているということがある。この問題を解決していくためには学生が地域に関心を持ち、周辺住民のことを考えられるようにしなければならないと思い、「トング Day」をおこなうことにした。この活動の目的として「学生の地域貢献の場を設ける」「学生と地域の交流の場を増やす」「学生と地域住民の美化意識を高める」という3つの項目を掲げ、地域の清掃活動への参加や「トング Day」を実施し、明学生の有志と一緒に活動してきた。

これまでの経過としては、地域の清掃活動に参加して、戸塚駅前のペデストリアンデッキの清掃（7月）や小田急分譲地内の公園清掃（11月）などの活動をおこなった。活動を通して地域の方がどのような取り組みをおこなっているのかということを知ることができ、また地域の方との繋がりができた。また、Reople が主催して「トング Day」を2回実施した。11月26日に実施した「トング Day vol.1」では、明学生5名の参加者と一緒に、帰り道に横浜校舎から戸塚駅までの道を清掃した。普段は特に気にしていない道でも、意識して見てみるとかなりのゴミが落ちていた。拾ったゴミは横浜市の分別に従って燃えるゴミ、プラスチックゴミ、ビン・缶・ペットボトルに分別し、ゴミ袋1袋分のゴミを拾った。12月21日におこなった「トング Day vol.2」は戸塚駅のペデストリアンデッキで開催された冬至キャンドルナイトにあわせて実施し、戸塚駅周辺の清掃活動をおこなった。明学生や高校生、東戸塚小学校の子どもたちとその保護者などが集まり、参加者は総勢20名を越えた。子どもたちがにぎやかに街を歩いてたくさんのごみを拾い、2袋分のゴミを集めることが出来た。参加者の子どもから「道にゴミを捨てちゃいけないよね」という言葉が出るなど、地域住民の美化意識の向上にもつながったのではないかなと思う。

今までの活動では広報が足りず「トング Day」に参加する明学生が少なかった。これからは明学生に広く認知される活動になるために学内でも活動を活発におこない、誰でも参加できるボランティアを目指していく。そのために定期的に「トング Day」を実施して、広く参加を呼びかけるなどの努力をしていきたい。また、清掃活動だけではなく環境について考えるワークショップなどを企画し、明学生が地域や環境のことを考えるきっかけとなる活動として「トング Day」を続けていきたいと考えている。今後活動を継続して参加者を増やし、将来的には地域住民と協力して「トング Day」をおこなうなどの活動を展開し、明学生と地域をつなぐ役割を果たせるようになっていきたい。

（社会学部社会学科2年 菊地由花）